
‡ TRUE HAPPINESS ‡

たか坊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

TRUE HAPPINESS

【コード】

N0035D

【作者名】

たか坊

【あらすじ】

アメリカに行く家族と別れ祖父母の家に来た、橘仁。隣りに住む同じ歳の片山美穂に出会い、かつて美穂の亡き父のやっていたアメフトに少し興味を持つ。しかし仁の通う碧山高校のアメフト部は試合ができる人数がない。中学にやっていた野球のおかげもあり、並外れた強肩を持つ仁を見て、かつて美穂の父と共に碧山高校を全国制覇に導いた、顧問の平賀は黄金時代を取り戻そうと熱を入れた指導をする。高校生の部活と恋を描いた感動青春ラブストーリー！。

第一話：別れと出会い（前書き）

読者の皆様、このETRUE HAPPINESSを見つけてくださりありがとうございます。この小説を読むにあたり、登場人物鑑を先に見ることをオススメいたします。どうぞごゆっくり読み耽ってください。

第一話：別れと出会い

この春、俺はやつと高校生になった。親父の仕事の都合で、俺以外の家族は皆アメリカに引っ越したが、俺は一人日本に残り、祖母の家に厄介になることになった。

あおやまぢょう 碧山町。読んで字のごとく、山と海に面した街。兵庫県にあり、急な丘に幾つもの住宅が建ち並んでいる。俺はこの街の高校に通う事になった。別に心配事はなかった。自ら残る事を決めたわけだし、快く居候させてくれる祖父母にも感謝しなければならぬ。ただ、丘の一番上にある祖父母の家から麓ふもとの学校まで毎日通う事ができるかどうかは心配だった。なにせ長く急だ。

もう四月なのに少し冷たい浜風が季節外れの風鈴を鳴らす音が覚めた。時計を見ると、まだ6時だ。二度寝を試みたが失敗し、仕方なく階段を降りた。

一階では祖母が釜でご飯を炊いている。正直、ここに来てもう1週間経つが、この光景にはまだ慣れない。今時釜でご飯を炊いている家などそう見ない。この碧山町でも多くはないだろう。

ばあちゃんは俺に気付いたのか、持っていた小枝を置き、こちらに来た。

「今日は随分と早起きなんだね」

白髪混じりの髪に手ぬぐいを被り、シワの多い顔の、正に日本を代表するおばあちゃんスタイルだ。

「目が覚めて、あんま寝れんかった」

ばあちゃんはまた微笑み、

「じいさんが畑に朝の野菜を取りに行つとるから手伝つてやってくれんかの？」

俺はそれを聞き、家を出てじいちゃんの所へ向かった。いつ見てもこの景色は素晴らしい。碧山の街を一望できる。

俺はこの景色を堪能しながら家の前の坂を降り畑へ向かった。畑につくと、じいちゃんがタオルを首にかけ、麦わら帽子を被り野菜を採つてる。

「じいちゃん、運ぶの手伝つよ」

俺は野菜の入ってる籠かごを持ちじいちゃんに言った。

「おお、助かるわい。ワシもすぐ行くからばあさんに美味しい飯作つてくれと頼んでこい」

じいちゃんは笑いながら言った。

俺はまた坂を上り家に戻った。帰る途中にジャージ姿の女の子が上から降りて来た。彼女は軽く会釈をして走り去った。

ここに来て一週間経ったが、あんな子を見たのは初めてだ。ジャージ姿で、長い黒髪のポニーテールの女の子だった。歳は同じ位だろうか。大和撫子って言葉が似合いそうな感じだ。

釜戸に行くとはあちゃんが野菜を待ち切れんばかりにまな板と包丁を持っていた。俺は籠ごと野菜を渡し、汚れた手を水で洗い流した。ばあちゃんは採れたての野菜をいつもと変わらないと思われる

手際で調理していた。俺は靴を脱ぎ囲炉裏のある居間に座りばあちゃんにさっきの子の事を聞いてみた。

「なあ、ばあちゃん。近所に俺くらいの歳の女の子っている？」

ばあちゃんは野菜を切りながら、

「お隣の美穂ちゃんか？確かお前と同じ今年から高校生だったかのお。べっぴんさんじゃぞ」

ばあちゃんは笑いながらこちらをちらりと見た。

確信はないが恐らくその美穂ちゃんとやらで間違いないだろう。まさかお隣さんだったとは。

隣りは、片山さんちだ。確かここに来た時挨拶をしにいったから覚えてる。お隣にあんな可愛い子がいるのは悪い気はしない。

そんな事を考えていたら外から声がした。

「門おばあちゃん〜玉子持って来たよ〜」

元気のいい女の子の声だ。門おばあちゃん。多分ばあちゃんの苗字、門倉だからだろう。

俺は縁側に出た。そこにいたのは紛れも無くあのジャージの子だった。

玉子の入った籠を持ち立っている。美穂は俺に気付いたらしくこちらに歩いて来た。

「あ、初めまして。隣りの片山美穂です。え〜と…」

可愛らしい声だった。少しイメージとは違ったが、自己紹介をさ

れたのでこちらも返すのが礼儀だろう。

「先週ここに越して来た、たちはな橘仁じんです。よろしく」

美穂は少し不思議そうな顔をしていた。恐らく門倉という苗字じゃない事に疑問を持っただろうか。しかし数秒後には納得したような顔をして、

「仁君だね、よろしく。あ、これウチで育ててる鶏の玉子だから」

美穂は微笑み、玉子の入った籠を俺に手渡した。そしてニコツと笑い、

「先週ここに来たって事はもしかして私が仁君の初めての友達かな？これからもよろしくね」

そういい美穂は去って行った。

俺はしばらくそこにポーツと立っていた。

畑から帰って来たじいちゃんに声をかけられるまでずっと。

第一話・別れと出会い（後書き）

何かありましたらなんでもcommentしてください。

第二話：過去（前書き）

前回のあらすじ

家族と別れ、祖父母の家に来た仁。祖父母の田舎暮らしと堪能する仁は隣に住む同級生、片山美穂に出会う。その美穂の笑顔に不意を突かれ縁側で突っ立っている仁。

高校生の恋と青春を描いた青春ラブストーリー！。

第二話：過去

縁側で突っ立ってる俺を見たいいちゃん不思議そうに俺を正気に戻させた。なぜ突っ立ってたかは今になっては覚えてはいないが、多分不意を突かれたのだろう。あの笑顔は反則気味である。

俺は早々と朝食を済ませて二階上がりジャージに着替えた。部屋の中には涼しい浜風が吹き込んでいる。

そうこうしているとばあちゃんが俺を呼ぶ声がした。

俺は部屋を後にして下へ降りた。階段を降りるとそこには片山幸恵ちえさんが立っていた。

「あら、仁君こんにちわ」

ウェーブのかかった茶色い肩までの髪の毛が、風に揺られて靡なびいている。娘が美人なのになつとくできる顔立ちの人だ。俺と同じ子供がいるとは思えない。

「あ、どうも。つかばあちゃん何？」

ばあちゃんは頭の手拭を取って幸恵さんの方を見て、

「片山さんが蔵の大掃除をするらしいので、男手が必要じゃろうてお前さんと呼んだんじゃないよ」

幸恵さんは少し申し訳なさそうな顔をして、

「ごめんなさいね仁君。私はいいって行っただけで門倉さんがどうしてもっておっしゃって。お暇だったらお願いしていいかしら？」

こんな綺麗な人に頼まれて断れるわけもなく、それにどうせ暇だったわけだ。家にも雑誌とかテレビを見てるだけだし、体を動かしたくないと鈍ってしまう。
幸恵さんはニコツと微笑み、

「じゃあお願いしちゃうかしら。蔵は家の裏にあるから、用意ができたら来て頂戴ね」

そういつて去っていった。

あの笑顔は母親譲りなのだと思いついた。本当に反則である。

俺はばあちゃんにマスクを貰い、お隣の片山さんの家の蔵へ向かった。

家の裏には竹やぶが奥までずらっと立っている。そのすぐ近くに大きな蔵があった。蔵の入り口には幸恵さんと美穂が立っていた。俺に気づいた美穂が手を振りながら、

「仁くん、こっちこっち」

と呼んでいる。俺は少し足早に二人の下へ向かった。

近くにいくと余計に大きく見える。中にいったい何が入っているのだろう。

「さあ二人とも、大掃除開始」

元気よく手を大きく上に上げる二人。俺も釣られて上げかけてしまいい中途半端なあげ方になってしまった。

それを見た美穂は、

「仁君恥ずかしがりやさんだね」と言い蔵の中へ入っていった。

俺も二人を追って蔵の中へ入った。中は薄暗くほこりっぽかった。

大掃除をするというわりにはきちんと整理されているように思えた。

「とりあえず、重たい物を外に出してもらっていいかしら？」

幸恵さんはそういつて俺を見た。

「あ、はい、わかりました」

俺はそう言つて、手当たりしだい外へ物を出していった。

本当にいろいろなものがある。箱に入っているのも具体的には何かはわからないが重さや音でいろいろなものだろうと判断はつく。俺は黙々と物を外に出していった。ある箱を運んでいるときに箱から何かが落ちた。俺は箱を地面に置き落ちたものを拾いに言った。ラグビーボール？紡錘型のボールが転がっていた。俺はそれを手にとつてみた。ラグビーボールにしては少し小さいように思えた。

「あ、仁君何遊んでるの」

後ろから少し大きな声がした。美穂だ。

「いや、別に遊んでたんじゃなくてラグビーボールが落ちたから拾つてただけだつて。」

俺は必死に反論していた。

すると美穂はこちらに近づいてきて、

「それは、ラグビーボールじゃなくてアメフトのボール」

美穂はそう言つてボールを箱に直して、

「まだ中にいっぱい箱残ってるよ」と言つて蔵の中に戻って行った。

その時の美穂の顔は、少し普通とは違った顔だった。

アメフト……。名前くらいしか聞いたことのないスポーツだ。アメリカでは野球より人気があるって聞いた事があったがルールとか全く知らなかった。

しかしなんでこんなボールが蔵にあるんだろうか。アメフトを知らない俺だが、どんなスポーツかくらいは知っている。鎧みたいな防具を着けてタックルし合うスポーツだ。美穂の家は女だけの一人っ子。どう考えても美穂がアメフトをしてるようには思えない。そんなことを考えていたら後ろから声がした。

「あの子、まだ引きずっているのかしら」

幸恵さんだった。少し悲しそうな顔をしていた。

「なんか、あつたんスか？」

俺は興味本意で聞いてしまった。

「あの子の父、私の夫はアメフトの選手だったの」

初耳だ。美穂の父が10年前に交通事故で亡くなった事は母さんから聞いていた。母さんは幸恵さんと友達らしく、いろいろ聞かされてはいたが、幸恵さんの旦那さんがアメフトの選手だったことは聞いていなかった。

「あの人はね、優秀な選手だったのよ。プロに入って、活躍して、NFLのチームからスカウトが来たの。でもね、アメリカに飛び立つとした前日に交通事故で」

「あ、すいません変な事聞いてしまって」

興味本意でいらぬ事を聞いてしまった。反省した俺の顔を見て幸恵さんは、

「いいのよ、もう過去の事だから。多分あの子ももう大丈夫だとは思っただけだね」

幸恵さんはそういつて蔵へ入っていった。

俺は深いため息を漏らし、また黙々と作業に取り掛かった。

俺はそれから作業が終わった後、幸恵さん特性のパイを食べた。

俺は片山さんの家を出るときに、

「また今度何かあつたらいつでも使つてやってください」

と幸恵さんに行つて家に戻つた。その時幸恵さんが、

「私は厳しいわよ」と微笑んだ顔は、朝見た幸恵さんの笑顔とは少し違つたように思えた。

第三話：海山神社と巫女さんと（前書き）

前回のあらすじ

美穂の家の手伝いをするようになった仁。蔵の掃除をしていると古いアメフトのボールを見つける。それを見た美穂のいつもとは違う反応を見て不思議がる仁。しかし美穂の母、幸恵の口から悲しい過去を聞くこととなった。

高校生の恋と青春を描いた青春ラブストーリー。

第三話：海山神社と巫女さんと

今日も早くに目が覚めた。まだ6時だ。俺はジャージに着替えている。早朝ランニングに行くことを日課にしようと思つた昨日の夜に決めたからだ。

俺はジャージに着替え終わり、1階へ降りてばあちゃんとじいちゃんに挨拶をして家を出た。

四月だがまだ肌寒い風を体を感じ、碧山町を眺めながら大きく深呼吸して坂を下って走り出した。

まだ一日目だ。初日から飛ばしすぎるのもよくないので、ばあちゃんたちの家の反対側にある神社に行くことにした。海山神社と呼ばれる、大きな神社らしい。ここからはそんなに距離は無いらしいが、部活を引退して早8ヶ月くらいになる。なのでこれくらいが丁度いいだろう。

俺は中学時代野球をやっていた。名門とはほど遠い普通の学校の普通の野球部だった。世間では進学校と呼ばれてはいる。部員もそれほど多くなく、俺は一応エースとしてピッチャーをやっていた。最高成績は全国大会一回戦敗退。俺の中では全国に行けたことだけでも誇れるものだった。それもあって体力には自信があったのだがまさかここまで落ちていとは思わなかった。軽く走っただけで息が荒くなってる。昔はこの程度軽く走っていた気もするのだが。

そこうしているうちに神社についた。
大きな鳥居が俺の前に聳え立っている。長い石畳の奥に本殿が見える。200メートルくらいだろうか。結構長い石畳だ。毎年ここで大きな祭りが開かれるらしい。

俺はその長い石畳の周りを見渡しながらゆっくりと歩いていった。荒かった息も次第に正常に戻った。しかしこれは本当に体力が落ちている。毎日走らなければ大変だ。

本堂までの道の両脇には竹やぶが立ち並んでいる。石畳と竹やぶ

の間には3メートルくらいの土のスペースがある。おそらく祭りの日にはぎっしりここに出店が立ち並ぶのだろうと想像しながら歩いていた。

長い長い石畳を歩き終わると、立派な本殿が建っていた。古びた木造建築の建物で、大きな賽銭箱の上にカラフルな布が鈴より垂れていた。俺はポケットから10円玉を取り出し賽銭箱へと投げ入れた。別に大してお願いすることもなく、俺はこれからの高校生活を祈願した。

祈願し終わると、俺は本殿の周りを探索した。初めて訪れる場所は探検したくなるものだ。

すると本殿の裏の小道を進んで行くと小さな石碑があった。かなり古いものだろう。コケがこびり付いている。石碑の上のほうに文字が刻んであった。

『汝の真の幸福とは』

そう書いてあった。続きも刻んであるのだが何が書いてあるかわからない。俺は少しの間、その石碑の前で立ち続けた。すると、

「それは、幸福の石」

後ろから声が聞こえた。俺は後ろを振り返りその声の主を見た。そこに立っていたのは巫女さんだった。赤と白の巫女の衣装を着て、手には竹箒を持った、歳は俺と変わらないくらいの女の子だった。

「幸福とは、人それぞれ違うもの。人の数だけ幸福がある。この石は自分の幸福とは何かということが刻まれた石です」

彼女はそういって俺の横に来た。

「今はもう、何が書いてあるかわからないですけどね」

そういつて彼女は微笑んだ。俺はキョトンとしていた。急に話しかけられたせいかもしれないが、おそらく、巫女の服を着た人なの今までに見たことがなかったからだろう。

「私は、この海山神社で巫女をやっている、美山楓みやまかえでです。あなたは・
・？」

彼女は軽く会釈をして俺を見た。

「俺は、橘仁です」

彼女は軽くクスツと笑い、

「ここをランニングのコースに選ぶとは、いいセンスですね」

背中まである黒髪が風で靡なびいている。

「どうです？お茶でも飲んでいきますか？」

楓さんはそういつて本殿の方に向かって行った。

俺はその後を歩いていった。すると本殿横の小さな建物があつた。

彼女は、「ここで待っていてください」といい中へ入って行った。

おそらくここはおみくじやお守りが売っているところらしい。

辺りをキョロキョロ見渡していると、楓さんがお茶を持って出てきた。俺はお茶を受け取りありがたく頂くことにした。整った顔立ちで綺麗な顔をしている。俺は失礼にも歳を聞くことにした。

「あの、楓さんっておいかつなんスか？俺くらいなように見えるん

スけど」

楓さんは軽く微笑み、

「17歳ですよ。高校2年生です」

俺のひとつ上だった。俺の先輩にあたる。

「俺は16です。今年高1です」

楓さんは、ニコツと笑い、

「私の後輩になるんですね。ヨロシクお願いしますね橘君」

俺は飲み終わった湯呑を楓さんに渡した。

「またいつでも来てください。お茶くらいならお出しできるので」

楓さんはそういって微笑んだ。

俺はその後また走って、来た道に戻った。息が荒くなる自分に呆れながら俺は家へと走った。

家に戻ると俺はヘトヘトだった。それを見たじいちゃんが、「三日坊主にならんようにな」と笑いながら言ってきたが、「ご褒美に楓さんのお茶が飲めるならこれくらい屁でもない。

これでひとつ、朝の楽しみができた。

第四話：後悔（前書き）

前回のあらすじ

早朝ランニングをしている仁は、海山神社をランニングのコースに選ぶ。そこで巫女をやっている美山楓に出会う。楓のいれるお茶に和み、毎日行くことを決意する仁であった。

高校生の恋と青春を描いた青春ラブストーリー。

第四話：後悔

入学式まで残すところ後一日、前日を無事迎えることができた。俺がここに来て丁度2週間が経った。

俺は早朝ランニングを済ませ、服に着替えていた。赤のインナーに黒の上着、そして黒のジーンズ。

早朝ランニングはちゃんと続いている。今日で6日くらいは続いている。生憎あいにくご褒美である楓さんのお茶は毎日飲めるわけでもなかった。毎日同じ時間に掃除しているわけではなさそうだ。

1階へ降りると、いつものジャージ姿じゃない俺を見てばあちゃんがニヤニヤしている。

「美穂ちゃんとデートじゃから張り切てるのお」

ばあちゃんは笑いながらからかった。

「ばあちゃん、朝も言ったけどデートじゃねえって」

今日の朝、俺はばあちゃんに本屋の場所を聞いていた。ばあちゃんの説明では全くわからない。恐らくここら辺の地理に詳しくはわからないだろうが。その時丁度玉子を持って来ていた美穂が、「私が案内する」と言い今に至っている。それで朝からばあちゃんはデートデートうるさいわけだ。

「ほんじゃ、行ってくるから」

俺はニヤニヤしているばあちゃんに別れを告げ、俺は美穂の家に向かった。

家の前で待っていると、「いつてきま〜す」という声が聞こえた。
約束時間丁度だ。

「おまたせ〜」

いつもは後ろで結んでいる髪は今日は結ばれず靡いている。ジーンズに赤のインナー。白いジャケットを着ている。なにやらボーイツシユな感じだ。

「仁君のジャージじゃない姿初めて見たかも」

美穂は笑いながら俺の服装をジロジロ見ている。

「お前だつてそうだろうが。ほれ、早く案内した案内した」

俺は少し照れくさく、先を急がせた。

本屋は一番麓にあるらしく、歩いて下まで降りなきゃならない。帰りにまたこの坂道を登ってこなければならぬと思うとゾツとす。なぜ本屋に行くのかというと、アメフトについての情報が欲しかったからだ。そんなものインターネットでちよちよいと調べればすぐわかるものなのだが、家にあるわけもない。じいちゃんやばあちゃんはそのようなものがないからな。それに美穂の家にはあるらしいが、アメフトの事を調べるのは少し気が引ける。だから仕方なく本屋に買いに行くわけだ。

丁度坂道の半分辺りを過ぎたころ、横の通りから自転車を押す二人組の男が叫んできた。

「おい美穂」

知り合いだろうか？美穂も手を振り返していた。二人組みの男が近づいてきて一人の男が美穂に話しかけた。

「よう、美穂。買い物か？」

美穂が返す。

「うん。ちょこつと本屋にね」

美穂に話しかけている男は、身長が高く、ロンゲの黒髪の男だった。

「そっちの彼は？」

もう一人の男が話しかけてきた。こっちは俺と同じくらいの身長だろうか？くせつけのあるカールのかかった髪型だ。二人ともジャージ姿だ。

「えっと、こちらはこないだお隣に引っ越してきた、橘仁君。私たちと同じ今年高1だよ」

美穂が自己紹介をしてくれたので、俺も続いて軽く挨拶をした。

ロンゲ男が、

「お、転校生か。よくこんな田舎に来たもんだぜ」

カール男が突っ込む。

「転校生じゃないでしょ。まだ僕たちも入学してないしね。あ、僕は長瀬誠ながせまこと。よろしくね橘君。ちなみに誠でいいからね」

お柄かな優しそうなしゃべり方だ。

「俺は、西城剛せいじょう。西城でも剛でも好きな方で呼んでくれよ」

二人とも性格は正反対なような気がした。ただの目測なのだが。

「二人は何処に行くの？」

美穂が二人に尋ねた。二人はお互い顔を合わせてニヤリと笑い。

「内緒だつつつの。悪いな美穂。俺たち急いでるんで。ほら行くぞ誠」

「ごめんね美穂ちゃん。じゃあまた明日、橘君」

そういつと二人は自転車で坂を下って行った。この坂道を自転車で降りると気持ちよさそうだ。美穂は頬を膨らませて、

「秘密だなんてひどいよ二人とも」

と怒っていた。俺はその顔を見て思わず噴出してしまった。なにせちょっと可愛かったからだ。

「あ、仁君笑ったな。ひどいひどい」

そういつて美穂は俺を殴って来た。怒る美穂の機嫌を直しつつ、俺たちは目的地の本屋についた。

俺は美穂に「ここで待つていてくれ」と言い中に入った。あいつにアメフトの本を買いに来たとは言っていないからだ。

俺は本屋に入り本を探していた。10分くらい探し回ったが、小さな町の本屋だ。アメフトの本があるわけもなく俺は店の人に取り寄せてもらうようお願いした。

店の人が電話をしてくれてる時、ふと外を見てみると、美穂が男の人としゃべっていた。年は30代後半くらいだろうか。眼鏡をかけた黒髪の男の人だ。

「いよいよ明日入学だね。君が入学してくれるのを楽しみにしていたよ。もし良かったら僕の部活に入ってくれよ」

「良かったらだなんて。絶対先生の部活に入りますよ。その時はヨロシクお願いしますね」

生憎、俺にはその会話は聞こえなかったが、美穂があんなに楽しそうな顔を見るのは初めてだった。初めて出会った時に見せたあの美穂の笑顔でさえ、偽りの笑顔かと思っただほどだ。俺はすこし変な気分だった。別に焼もちとかそういうのじゃない。でも何か胸の中がすっきりしない。

俺は店の人に取り寄せる日にちを聞き、店を出た。そこにはもうあの男はいなかった。

「さっきの人は？」

さりげなく聞いてみた。

「あの人は高校の弓道の先生。お父さんの後輩さんなの。それでね私の憧れの人」

俺は聞かなければよかったと後悔した。多分憧れの人っていうのに後悔したのだろう。

俺たちはその後何処に寄ることも無く家に戻った。美穂が、「ほかにも案内しようか？」と言ってくれたのだが、俺はそんな気分じゃなかった。美穂には悪いことをしたと家に帰り自分のベットの上で後悔した。

今日は二回も後悔をした。

俺はスッキリしない自分の胸をどうにかスッキリさせようと頑張りながら眠りについた。

いよいよ明日は入学式だ。

第五話：入学式（前書き）

前回のあらすじ

美穂と町の本屋に向かう仁。そこで西城と長瀬の二人に出会う。そして本屋では何やら美穂と親しげに話す男がいた。いつもは見せない美穂の本当の笑顔がその男に向けられている事に苛立ちを覚える仁。

高校生の恋と青春を描いた青春ラブストーリー！。

第五話：入学式

高校生活。それは青春の場。部活に恋にと、学生生活を大いに楽しむ場である。俺はそんな高校生活を送るべく、今日晴れ晴れしく入学式を迎えるわけである。

碧山高校。創立60年を超える伝統ある高校である。昔からの地元高校とあって部活動などはそれほど強豪ではない。個人種目で弓道が毎年全国大会へいつているくらいらしい。

俺は少し緊張していた。なにせ地元高校だけあって昔からの古友が多い学校だ。正に転校してきたような気分だった。しかし俺はそんな小さいことをあまり気にする男ではなかったので言うほどは緊張はしてなかった。学校までの道のりで、美穂の母、幸恵さんが、「仁君、全然緊張してるように見えないね」と言ったほどだ。

門の前には学ラン・セーラー服の生徒と、いつもとは違う服装であろう親たちがゾロゾロいた。田舎の学校の割には、門構えといい、かなりの立派な学校に見えた。中学とは大違いだ。

内心緊張している俺とは裏腹に、美穂はニコニコ笑顔である。天真爛漫というか鈍感というか。

俺たちは幸恵さんと一緒に体育館の壁に貼ってあるクラス分け表を見に行った。正直、美穂と一緒のクラスなら、かなり楽なのだが俺は1年3組らしい。高校は普通7から8クラスくらいはあるのだから、この学校は4クラスしかない。これなら美穂と同じクラスになる確率もあると思ったのだが、3組の欄に美穂の名前は無く、代わりに、「西城 剛」と「長瀬 誠」の文字があった。昨日会ったあいつらだ。

そうは東の間、後ろから声がした。

「おお、お前一緒のクラスか。ヨロシクな橋」

西城だ。俺より10センチは高い位置から俺の肩を抱いている。

「僕も一緒だね。昨日会ったのは運命だったのかな」

えらく軽い運命である。長瀬はニコニコ笑顔で俺を見ている。

正直、少しは面識のあるこいつらと同じクラスなのはせめてもの救いではある。

「なんだ？お前たち知り合いなのか？あまり見ない顔だが」

誰かがしゃべりかけてきた。かなりの男前だった。真面目そうにも見える。身長は俺より少し高かった。

「お、幸一。お前も3組だな」

こいつも同じクラスらしい。

「昨日知り合ったんだ。こないだ美穂ちゃんの家の際に越してきた橘君だよ」

長瀬が軽く紹介してくれた。

「そうなのか？片山の家の際か。じゃあ俺の家とも近いな。俺は、白石幸一。ヨロシクな」

そういつて白石は片手を出して握手を求めてきた。

「ああ、ヨロシク頼む」

俺はその握手に答えた。見た目よりは大きな手だった。

俺たちはいろいろと話しながら教室へ向かった。一旦点呼を取ってから入場するらしい。俺たちはそれぞれの席に座り担任を待った。しばらくすると教室の扉が開き担任と思われるスーツ姿の男が入ってきた。背の高い少し筋肉質な男だった。頭をボリボリかき、欠伸くびをしながら教卓に立った。

「えー、今日からお前たちの担任をすることになった、平賀健二だ。教科は英語。んまあよろしく頼むわ」

英語教師に見えないと心の中で突っ込みを入れた。どう見ても体育会系だ。しかしその割にはめんどくさそうな顔をしている。

「詳しい自己紹介は後だ。とりあえずメンドクサー式に向かうぞ」
教室内で笑いが起きた。本人はウケを狙ったわけではなさそうで、本当にめんどくさそうである。教師が入学式をめんどくさがるなんて聞いたことが無い。

俺たちは平賀先生に連れられ体育館に入場した。そこには既に在校生と保護者、来賓の人、学校関係者が座っていた。結構な数だった。

俺たちは在校生が両側に座っている通路を歩いて自分たちの椅子へと向かった。途中通路の端っこにいる楓さんを見つけた。楓さんも俺に気づき微笑えんだ。いつ見ても綺麗だ。

俺が自分の席に着き、教頭の着席の合図で席に座った瞬間後ろから西城が話しかけてきた。

「お前美山先輩と知り合いなのかよ」

少し驚いた口調だった。

「ああ。いつも朝海山神社までランニングしてるからな。それで知り合ったんだよ」

西城はのろけた顔をして、

「美山先輩綺麗だよな。あの人彼氏とかいんのかな」

まああの綺麗な顔立ちだ。ファンがいて当然だろう。俺がしゃべろうとした時、西城が「イタツ」という声を発した。どうやら足を踏まれたらしい。必死に痛みを堪えている西城に隣の女子が怒りつけた。

「アンタ、式中に何しゃべってんのよ。静かにしなさい」

眼鏡をかけた女の子だった。後ろで髪を三つ編みにしている。

「ほら、あなたも前向いて。怒られちゃうわよ」

俺はとつさに前を向いた。初日から怒られるのは御免だ。

それからは西城も静かだった。校長の長い祝辞も終わり、プロگرامは「新入生の言葉」まで進んでいた。

「新入生の言葉。新入生代表、片山美穂」

驚いた。まさか代表が美穂だったとは。それなのによくあんなにニコニコしらてたものだ。美穂は堂々としていた。その時の美穂は少し輝いて見えた。

美穂の祝辞も無事に終わり、俺たちはまた教室へ戻った。戻る途中、西城はずっと楓さんの話ばかりだった。俺と長瀬と白石は笑いながらそれを聞いてやっていた。

教室へ着くと平賀先生が教卓へ立った。

「えーっとまあ入学式お疲れさん。早く家に帰してやりてえが、後1時間何かしとかなきゃならん。まあお前たちと会ったのはこれで初めて。お互い自己紹介でもしとくか。それじゃ、右の端からどうぞ」

平賀先生はそう言って窓側に行きパイプ椅子に座った。

自己紹介はお決まりだ。入学してすぐ絶対通らなければならぬ道。これでほとんど第一印象が決まる。

順々に自己紹介をしていく。俺は自分の自己紹介をどうしようか考えるので必死だった。他の自己紹介なんて聞いている暇なんてなかった。ようやく頭の中で大体のストーリーができたところで先ほど西城の足を踏みつけた子の番だった。

「南中から来ました、高瀬香織たかせかおりです。部活動は陸上をしていました。趣味は料理で、好きな科目は国語です」

拍手が送られる。陸上をやっているともあまり想像がつかない感じだが、人は見かけによらないのだろう。

そうこうしてる間に俺の番になった。俺は教卓へと上がった。皆、見かけない顔だけあって注目している。

「えっと、佐伯中から来ました、橘仁です」

教室内がざわついた。「佐伯中って言ったら進学校だぜ。」とかいう声もちらほら聞こえた。まあ仕方ない事だ。俺は続けた。

「部活は野球で、ピッチャーをしてました。好きな科目は英・・・」

俺が最後まで言い終わる前にある女の子が声を出した。

「あ、知ってる」

中ほどに座っている子だった。茶髪で肩までのセミロングだ。

「佐伯中、橘仁。アンダースローのエースピッチャー。全国大会で見た」

思わぬ発言だった。正にその通りだからだ。俺のフォームはアンダースローで間違いない。教室はざわついている。「全国だってよ。」

「すげーじゃん。」いろいろな声が飛び交っている。俺は先生に目で助けを求めたが、先生は目を瞑つむったまま静かに座っている。寝ているのか？俺はどうしようもなく強行で続けようと思ったその時、高瀬が怒鳴った。

「人の自己紹介中ですよ。静かに聴きなさいよ」

助かった。こういう事が堂々と言えるのは素晴らしいことだ。俺はその後無事自己紹介を終え、一機おんきは大きな拍手を貰った。

全員の自己紹介が終わると座っていた先生は立ち上がり教卓に立った。別に寝ていたわけではなさそうだ。

「え〜んじゃあ俺の紹介しとくか。今日からお前たちの担任になった、平賀健二だ。歳は41。未だ独身だ。教科は英語。そして・・・」

俺はその後の言葉に驚いた。

「アメフト部の顧問だ」

俺は啞然としていた。不意を突かれた感じだった。アメフト部の顧問が担任。美穂が同じクラスじゃなくて良かったと初めて思った。その後、教科書やらプリントやらを配られた後、挨拶をして無事学校初日が終わった。

カバンに物を詰め込んでいる俺の前に、先ほど俺を見たという女の子が来た。

「さつきはごめんね。私のせいでせつかくの自己紹介が・・・」

申し訳なさそうにしている。別にこの子は悪くないし、俺も全然気にしてはいない。むしろそのおかげで拍手喝采で自己紹介を終えれたのだから。

「いや、全然いいよ。つか俺みたいなのを知ってしてくれたことはちょっと光栄かな」

彼女は笑顔になり、

「私は北中から来た、宇野あゆみ。ヨロシクね橘君」

とても愛らしい笑顔だった。全国大会で俺を見たということは野球に興味あるんだろうか？詳しいことは聞けなかった。

俺は美穂と帰ろうとしたのだが、あいつは、「部活見学に行くから先に帰っていいよ。」と足早にどこかに向かった。おそらく弓道部のあの男の下へだろう。

俺は仕方なく、西城と長瀬、そして家が近所だという白石と一緒に帰った。帰り道では俺の話題で持ちきりだった。野球部での事、佐伯中のことなど、いろいろ話した。白石に、「高校でも野球を続けるのか？」と聞かれたが、俺は、「高校では他の部に入るよ。」

と答えた。西城は勿体無いと俺を説得していたが、俺は野球部に入るつもりはなかった。俺の頭の中には「アメフト」という四文字がちらついていた。

第六話：アメフト（前書き）

前回のあらすじ

無事入学式を迎えることができた仁。美穂と同じクラスにはなれなかったが、白石や他のクラスメイトに出会う。そして担任の平賀に出会う。担任の平賀はアメフト部の顧問だった。

高校生の恋と青春を描いた青春ラブストーリー。

第六話：アメフト

初日を成功させたもあり、毎日順調に進んでいる。各教科では先生たちの自己紹介がメインの一週間だった。それに身体測定なども行われた。俺は175センチだった。中学とあまり変わらない。驚いたのは西城だった。185センチ。さすがもとバスケット部だけのことはある。

学校生活が始まって初めての土日を迎えるわけだが、俺は駅前にいた。なぜここにいるのかというと話せば長くなる。昨日の放課後に、西城と長瀬に誘われたのだ。どこに行くかは教えられずにただ駅前で待っていてくれとのことだった。

集合時間の遅れること10分。あいつらが来た。

「よー、待たせたな」

西城が長瀬と一緒に来た。

「ごめんね。剛が寝坊しててさ」

そんなことだろうとは思った。長瀬は几帳面だから時間にルーズそうではない。

「つか、俺を何処に連れて行く気だ？」

行き先も聞かずに呼び出されたのだ。聞いて当然だろう。

「まあ着いてからのお楽しみだつづつの」

西城はそう言って切符売り場に向かった。着いてからのお楽しみっ

て、いったい何のドツキりだか。

俺は電車で揺られ行き先不明の旅に出発した。初めてアメリカ大陸にたどり着いたパイオニアな気分だ。

さすがは田舎の電車。2両編成であまり人も乗っていない。内装も昭和の雰囲気^{かも}を醸し出している。車窓から見える景色は素晴らしなものだった。まさに海の上を走っているようだった。

電車で揺られること20分、目的地である駅についたらしい。そこは俺の知っている世間一般にいう都会だった。車もバンバン通っている。碧山町とは大違いだ。

俺たちは駅前のバス停からバスに乗った。いったい何処に連れて行く気だろうか。人々が忙しそうに歩いている。碧山町ではこんな景色見ることなんてない。

そうこうしていると西城がバスのボタンを押した。次の停車のバス停の名前は「海南総合陸上競技場前」となっていた。陸上競技場？ いったい何を見に来たというのだろうか。

俺はバス賃を払いバスを降りた。目に前には「海南総合陸上競技場」という門が立っていた。競技場の外にも結構な人がいる。何かの大会が開かれているのだろうか。

俺は周りを見渡しながら、先に行く西城たちの後を追って競技場に入った。

「うへ〜結構入ってるなあ」

俺もビックリした。それほど大きな競技場ではないが、かなりの人が入っている。しかしそんなことより大きな衝撃が俺の目に飛び込んできた。

「アメフト・・・」

俺は不意に声を漏らした。なにせ俺の見つめる競技場の真ん中では、

鎧のような防具を着けた選手が練習をしていたからだ。

「そう、今日はアメフトに試合を見に来たんだよ」

長瀬はそう言っただけで歩き出した。アメフトの試合。俺は少しソワソワしていた。「百聞は一見にしかず」。本で見るよりか生で見ただけがいい。西城たちと歩いていると、聞き覚えのある声があった。

「こつちだこつち」

声の主は白石だった。先に来て席を取っていてくれたらしい。俺は白石に挨拶をして席に座った。

「いい席じゃんよ」

西城が辺りを見ながら言う。

「当たり前だろ。ここなら一番見やすいだろ」

俺は少し驚いた。この3人がまさかアメフトに興味を持っていたなんて。試合を見に来るなんてかなりの興味だ。

俺は俺たちの後ろにある電光掲示板みたいなを見た。「広稜工業高校 明星学院高校」という文字が書いてあった。今日はその両校の試合らしい。

「どつちが勝つと思う？」

長瀬が西城に聞いた。

「そりゃ明学だろ。あそこは最強だからな」

しかし白石が突っ込む。

「いや、広工もかなり名門だ。いい勝負になるだろ」

話を聞く分にはかなりいい勝負になりそうな気がした。正直両校とも名前すらあまり聞かない高校だ。ましてやアメフト部の強さなど俺にわかるはずもない。

「あ、橘君あんまりアメフトとか興味なかった？」

長瀬が申し訳なさそうに聞いてきた。

「いた、ちよつと興味あつたし、一度見てみたいと思つてたから感謝するよ」

俺は正直に言つた。本当にこいつらには感謝してる。

「やっぱ男ならアメフトだよなあ」

その、男ならつていうのには疑問を持ったが、俺は一応賛同しておいた。

会場のザワツキが少し大きくなった。選手が入場したらしい。割れんばかりの歓声が競技場を飲み込んでいる。赤いユニホームの選手が入場してきた。広陵工業高校だ。体格のいい選手が何人もいる。まさに柔道部みたいだ。

続いて白に黄色のラインの入ったユニホーム、明星学院の選手が入つて来た。こちらはそれほど大きな体格ではない。まあそれでも体格はいいほうだ。

「お、明星の若きエースの一角、雛形だ」

西城は背番号21番の選手を見てそう言った。

「でもすごいよね。2年生であの名門明星学院のエースになるなんて。さすが天才ランニングバック（RB）は違うね」

RB？ポジションの名前だろうか。俺にはその雛形とかいう選手がすごいということくらいしかわからない。

「なあ長瀬、そのRBってのはなんなんだ？」

俺は長瀬に聞いてみた。

「ああ、ポジションの名前だよ。あ、もしかして橘君ルールと知らない？」

当たり前だ。アメフトに興味を持ったのもついこないだの事だ。

「アメフトっていうのは敵のエンドゾーンにタッチダウンしたら得点っていうルールだ。これはラグビーも一緒だが、違うのはタックルされて地面に倒れると攻撃が毎回セットされてから始まるってことだ。」

丁寧にも白石が説明してくれた。

「試合時間は60分で、30分で前半後半を区切ってる。それをまた15分でクォーターで区切って合計4クォーターある」

バスケの試合と似ているが、60分というのはまた長い。

「さっきも言ったが、タックルされて倒れるとそこでいったいプレーは止まるんだ。攻撃チームには4回プレーをすることができ権利がある。攻撃側はその4回で10ヤード（Y）以上進まなきゃならない。10Y以上のところでタックルされたらまた4回攻撃できる。10Y以下ならまたその攻撃を始めたところからやり直しになるってわけだ。どうだわかったか？」

実にわかりやすい説明だ。初めての俺でもよくわかる。これも才能ってやつか。

「アメフトは11人でやるスポーツだ。さっきのRBってのはポジション名だ。ポジションは大きく二つ、オフENSチームとディフェンSチームに分ける。つまり攻撃するときの選手とディフェンSするときの選手ってわけだ。お、もう試合始まつてるじゃん」

白石がそういっているので、フィールドに目をやると選手が陣形を組んで立っていた。さっき言ったセット攻撃が始まるらしい。

「見てみる、この場合明星が攻撃、広工が守備だ。明星の中心にいる中央の5人いるだろ。あれがオフENSシヴライン（OL）だ。いわば壁みたなものだな。真ん中からセンター（C）その両側がガード（G）、そして両サイドがタックル（T）だ。そいでそのまた端がエンド（E）ってポジションだ。ランプレーの時はさっき言ったRBが走るためにブロックに行き、パスプレーの時はパスするまでの壁だな」

ランプレーとかパスプレーがどのようなものななんかはわからなかったが、大体はわかった気がする。

「そのラインの後ろにいる指示出してるやつがいるだろ？あれがクォーターバック（QB）だ。まあ司令塔ってとこだ。ロングパス投げたり、RBにパスして走らせたり。まあ攻撃の中心となるプレーヤーだ。お、やっぱり明星はウィツシュボーンか」

白石が西城に言う。

「まあな、明星はランチームだ。あのラン攻撃は一級品だろ」

よくわからないがとにかく凄いということだけはわかった。

「見てみる、陣形が鳥の叉骨に見たいに見えるだろ？だからさ」

言われてみればそう見える。というか当て付けのようにも思えるが。

「そのQBの後ろにいるのがRBだ。パスじゃなくて走って10Y前進、いや明星ならタッチダウンまで行くかな」

白石は微笑んだ。そのとき歓声が沸いた。プレーが始まったらしい。すごい迫力だ。ライン同士がぶつかって押し合ってる。すると一人のRBがボールを貰い走っている。あれがランプレーだろうか。敵を避けながら走ってる。しかし次の瞬間俺は衝撃を受けた。広工の選手がそのRBめがけてタックルしたからだ。当たってもんじやない。飛びついて、そのまま両選手とも吹っ飛んだ。実に痛そうだった。

「おしいな。後ちょっとで10Yだったのによ。ちゃんと避けるよあのRB」

西城が悔しがる。あのRBを気遣うばかりか批判している。俺はそのとき、アメフトがどれだけ過酷なスポーツかを知った。あんなタックル普通なのだろう。

2回目の攻撃が始まった。白石の言った通り、始めの位置かららしい。CがボールをQBへと股の間から渡し、攻撃が始まる。今度は先ほどとは違う、背番号21番のRBにボールを渡した。次の瞬間俺は鳥肌が立った。その21番の選手はあつという間にディフェンスを交わし、タッチダウンをしたのだった。足が速いとかいう次元じゃなかった。会場は狂喜乱舞だった。西城や白石も盛り上がっている。21番の選手も会場に手を振りそれに答える。

攻撃が終わったかと思ったら敵陣地の3Yくらい手間でまた明星が陣形を組んでいる。攻撃は終わったはずなのだが。

「白石、なんでまた明星の攻撃なんだ？」

俺はその疑問を聞いてみた。

「ああ、ポイント・アフター・タッチダウン（PAT）だよ。攻撃側は一回だけタッチダウン後に攻撃する権利を与えられるんだ。普通はフィールドゴールつってああいう風にキックで後ろのボールの間にいれるんだ」

明星の選手がCの出したボールをQBが地面にセットしてキックして見事ボールの間に決まった。

「今蹴ったのがキッカー（K）。まあキック専門の選手だな。PATの他にフィールドゴールの時にもでてくるかな」

アメフトにはいろいろなポジションがあるみたいだ。

明星の選手が自陣で一直線に並んでいる。何をするのだろうか。

広工の選手は散らばっている。

「何するんだ？」

俺は白石に尋ねた。

「ああ、フリーキックだよ。あれ？ああ広工のフリーキック見てなかったっけ？」

そういえばこれを見たのは今が初めてだ。見ていなかったのだろう。

「フリーキックってのは前後半の開始時と得点後の試合再開のために行われるキックのこと。普通自陣35ヤード上の地点からボールを蹴るんだ。ボールを敵陣に向けて蹴って、キックオフのプレーが開始する。その後、相手チームがキックしたボールをレシーブ側の選手が捕球して、敵陣に向けボールを持って走る。タックルとかでリターンが終了した時点でキックオフのプレーが終わり、そこからまたセットプレーが始まるんだ」

明星の選手がボールをキックしてプレーが始まった。それを広工の選手がキャッチして敵陣へ走っていく。しかし途中でタックルされてそこからセットプレーが始まった。

広工の選手が陣形を取っている。先ほどとはまた違う。

「ツーバックか。まあ普通はこれが基本だからな」

白石が長瀬に言う。

「そうだね。まあ明星みたいなランチームじゃないからね」

長瀬はフィールドを見つめながら答えた。そのチームによっている違うらしい。

QBの後ろには選手が二人、おそらくRBだろう。ラインの両サイドに3人の選手がいる。CがボールをQBに渡すとそのRBとは違うラインの横の選手が前へと走っていきQBがそれにパスを出しあっさり10Y前進してしまった。

「いいパスセンスだな。さすがこちらも名門校だぜ」

西城が褒める。おそらくこれがパスプレーというやつだろう。

「今パスを受け取ったのがワイルドレシーバー（WR）ってポジションだ。パスを受け取るパスプレーの重点的選手だ」

WR。後ろからくるパスをジャンプして適切に捕るのは野球のキャッチとは違いかなりのテクニクだ。

また広工の一回目の攻撃が始まるうとしてた。先ほどと同じバックだ。CがQBへとボールを渡しQBがパスコースを捜している。QBがパスコースを見つけてパスを出したが明星の選手がそれを手に当てて防いだ。

「今のはナイスプレイ。あのコーナーバック（CB）よく見ていたね」

長瀬が拍手を送る。また新しいポジションだ。デフェンスのポジションらしい。

「今、パスをカットしたのがCBだ。主にパスカバーをする選手だな。後、オフラインシヴライン同様、ディフェンスにもディフェンシヴラインってのがある。通常3人から4人くらいかな。そうそう、

後、ラインバッカー（LB）って言って明星のもう一人の・・・」

白石が最後まで言う前に競技場が沸いた。今までにない歓声だ。

「すげえ！ブリッツだぜブリッツ！」

西城が興奮している。

フィールドに目をやると広工の選手が仰向けになって倒れていた。その横には背番号1番の明星の選手が立っていた。

「明星最強のLB、釘宮だ」

白石がそう言った。ブリッツとは何か、いったいどんなプレーがあったのかはわからなかったが、素人の俺でもその釘宮という選手のオーラみたいなものを肌を感じていた。

結局試合は明星が75対28で圧勝した。一回で6点や9点入ると点数もかさ張るものだ。試合後のインタビュを明星の二人の工ひながたスが受けていた。「攻撃のエース、雛形薫、守備のエース、釘宮くきみや亮」その名前は俺の頭の中にこびり付いた。

帰りはアメフトの話題で持ちきりだった。俺たちはそんな話をしながらそれぞれの家に帰った。

晩御飯を食べているときも、風呂に入っているときも、ベットに入ったときも、まだおれは興奮から覚めなかった。

第七話・誇り（前書き）

前回のあらすじ

仁は西城たちに連れられアメフトの試合を見に来ていた。白熱する試合、そして明星の二人のエースのプレイを目の当たりにして感動を覚える。

高校生の恋と青春を描いた青春ラブストーリー。

第七話：誇り

一日明けた今日もまだ俺は昨日の余韻に浸っていた。なにせ本当にすごい試合だったからだ。白熱する試合。野球とはまた違う感じの迫力に俺は感動を覚えていた。

今日はお隣の美穂の母、幸恵さんが、美味しいケーキを焼いたから食べに来ないかと誘われた。俺は快くご馳走になることにした。

幸恵さんの家に着くと、幸恵さんは、「どうぞ上がってくださいな」と笑顔で出迎えてくれた。靴を脱ぎ、俺はお邪魔した。俺は美穂がいないことに気付き、幸恵さんに聞いてみた。

「あの、美穂はどっか出かけてるんすか？」

幸恵さんはクスツと笑い、

「ごめんね仁君。あの子今日は高校の弓道の練習に参加しにしているよ。お相手がこんな年増のおばちゃんじゃ悪いわね」

そういつてスリッパを出してくれた。年増のおばさんだなんてとんでもない。正直まだ30代前半だと言っても通じるくらいの綺麗な人だ。こんな綺麗な人とお茶できるなんてこの先一生ないかもしれない。

幸恵さんは俺を居間に案内してくれた。木造建築の割には、現代っぽい居間だ。早く座って幸恵さん特性ケーキを食べたいところだが、その前にやりたい事があったので幸恵さんにそのことを尋ねた。

「あの、美穂の親父さんに挨拶したいんすけど・・・」

幸恵さんは少し驚いた顔をしたが、軽く微笑んで、

「そしてくれるとあの人も喜ぶわ」

と俺を仏壇へ連れて行ってくれた。

俺の目の前には立派な仏壇があった。横には美穂の親父さんの写真が置いてあった。結構な男前さんだ。なるほどこの二人から産まれば、美穂のような美人が産まれるのだろう。俺はそう心の中で納得した。

俺は手を合わせた。何を思うわけではなく、無心で合掌していた。

俺の挨拶が終わると、いよいよ幸恵さんの特性ケーキだ。冷蔵庫の中から幸恵さんはチーズケーキを出した。黄色くふんわりしたチーズケーキだ。見るからに美味しそうなのがわかる。

幸恵さんは俺の分と自分の分、そして美穂の親父さん、俊一さんの分を切ってそれぞれ皿にのせ、仏壇へ向かいケーキを置いて帰ってきた。

「さあ、食べて食べて」

幸恵さんは俺にケーキを勧めた。俺もそれに答え、「いただきます」と一言いい口にチーズケーキを入れた。

濃厚な甘みと程よい酸味。そしてフワッフワの食感。まさに絶品中の絶品だ。おいしそうに食べる俺を見ながら幸恵さんはニコニコ笑顔である。

ケーキを食べている俺に、幸恵さんはしゃべりかけてきた。

「仁君、昨日アメフトの試合見に行っただって？」

俺の手が一瞬止まった。チラリと幸恵さんの方を見てみると、幸恵

さんは笑顔だった。

「どう？面白かったでしょ？」

そう聞かれて、俺はどう言葉を変えそうか迷っていた。しかし俺は、正直に自分の気持ちを言うべきだと、幸恵さんに本当の気持ちを伝えた。

「正直、めちゃくちゃ面白かったです。迫力といい何から何まで、今まで体感したことのないような興奮を覚えたくらいですし」

俺はいろいろ話した。広工のこと、明星のこと。そしてその明星のEース二人のこと。そして何より俺がアメフトに興味を持っていること。どれくらい話しただろうか。自分の親でもない幸恵さんに、まるで子供のように昨日感じたすべてを幸恵さんに話した。

幸恵さんはそれをまるで母親のように聞いてくれた。そして全部聞き終わった後に、「あの人みたいね」と小さく微笑んだ。

あの人。おそらく俊一さんのことだろうか。俺は少し不思議そうな顔をした。

「あの人と出会ったのはね、碧山高校だったの。一つ上の先輩で、友達の紹介で知り合ったの。あの人も仁君と一緒に、高校になると同時にこっちに来て、私は知り合うまで全然あの人のこと知らなかった。

私はね、あまりあの人の事は興味なかったの。向こうが私に気があるらしいからって紹介されただけだったしね。

そうして何ヶ月か経って、二人でデートに行ったの。デートと言っても碧山町のちょっとした浜辺だったけどね。

デートだっていうのにあの人ずっとアメフトの話ばかり。まるで無邪気な子供みたいにならずと私に話してくれるの。今の仁君みたいに

ね。それを私は聞くだけ。でもそのときのね、あの人の純粋な目に、私は惹かれたの。

そうして私たちは付き合うことになったの。そうして何ヶ月も経って、あの人は3年生最後の大会の迎えてた。私は勿論応援しに行きたわ。そうしてあの人たちは全国大会の決勝、クリスマスボウルまで言ったのよ。

そしてその決勝の前夜に、あの人はまだ私は高校2年なのにプロポーズして来たのよ？この大会で勝って、全国制覇したら僕と結婚してくれてね。私は勿論そのプロポーズを受けたくわ。でも私が卒業してからねって言ったけどね。

そしてあの人は見事優勝したわ。そしてあの人は卒業してプロに入った。私はそのままこの家の農業を継いで、あの人と結婚して、そして美穂が生まれたのよ」

俺は少し照れくさい気持ちになった。なぜだかはわからないが、話している幸恵さんの顔が少し誇らしげな感じだったからだろうか。おそらく幸恵さんは俊一さんのことを誇りに思っているのだろうかと思った。

俺はケーキを食べ終わり洗物を手伝った。その時幸恵さんに、「俊一さんは素敵な人だったんですね」と言つと、幸恵さんは、「アメフトアメフトうるさかったけどね」と笑い返してくれた。

俺は幸恵さんに頼まれて、仏壇の花の水を替えに仏壇へ向かった。仏壇の前にはいろいろな写真が飾ってあった。その中に裏向けの写真が置いてあった。裏には鉛筆で「碧山高校アメフト部」という文字が書いてあった。俺はその写真を手に取り見てみた。幸恵さんが言つたたクリスマスボウルで全国制覇したときの写真だろう。真ん中には俊一さんと幸恵さんらしき人が写っていた。その横には母さんだろうか？俺はまだ若い母さんを笑いながら見ていた。しかしその母さんと幸恵さんの後ろに見覚えがある人物が写っていた。

俺は我が目を疑った。そこに写つてたのは、担任の平賀先生だっ

た。確か41歳って言ったようなことを思い出した。俊一さんと同級生だ。まさかあの平賀先生が全国大会で優勝しているなんて思ってもみなかった。確かにアメフト部の顧問には持つてこいだ。

俺はその写真を置き、花の入ったピンを幸恵さんの元へ持つていった。俺はその後、じいちゃんとはあちゃんの分のケーキを頂き、家へと帰った。どうしてアメフトの試合を見に行ったのを知っているのか幸恵さんに聞いてみた。犯人はばあちゃんだった。本当に口が軽いといふかなんとうか……。

幸恵さんに、「部活はアメフト部に入るの？」と聞かれたが、俺は、「まだわかりません」と答えた。

確かに、アメフトに興味あるが、部活に入るかはわからない。それになんだか俺の頭には悲しい顔をした美穂が写っていたからだ。

第八話：仮入部（前編）（前書き）

前回のあらすじ

美穂の母、幸恵の特性ケーキを食べに行った仁。仁は幸恵の口から美穂の亡き父、俊一とのエピソードを聞く。俊一の仏壇の写真には担任の平賀の姿もあった。

高校生の恋と青春を描いた青春ラブストーリー。

第八話：仮入部〜前編〜

俺はいつものように学校へ登校していた。美穂は相変わらず朝練とやらに朝早くから行っている。なので俺はいつも一人で学校へ向かっている。まだ学校が始まって1週間くらいしか経っていないのに、あいつはもう弓道部に入部した気である。それにしても俺はどうしたものか。昨日は幸恵さんに、「わかりません」とは言ったものの、アメフトに興味を持っているのは事実だ。それに俺を悩ませる当の本人は、早々の入部する部活を決めている。頭が痛い。坂を下っていると後ろから声がした。

「おっはよ〜橘君」

そういつて俺の肩を叩き横に並ぶのは、クラスメイトの宇野あゆみだ。初日の自己紹介で俺を見たと言っていた子だ。

「ああ、おはよ」

俺は欠伸あくびをしながら挨拶をした。

「ねね、今日から仮入部だけど、やっぱり野球部に入るの？」

宇野は俺の腕を掴んでそう聞いてきた。

「ちよ、離せよ。野球部には入んねえよ。他の部活にすっから」

宇野は俺が腕を振りほどくと頬を膨らませて怒った。

「どっしてよ！橘君野球上手いじゃん。勿体ないって」

そりゃ、他の部活に入るより野球を続けた方がいいとは思う。何せ小学4年生から5年間やってきたわけだ。そこら辺の素人には負けない自信もある。しかし、俺は高校では野球はしないって決めただけだ。今更変えるつもりはない。

「どうしても！俺は高校ではやらねえって決めただよ。それに軟式と硬式じゃわけが違う」

俺はきつぱり宇野に言った。宇野は「も〜！」って怒って走って行ってしまった。いったい何を怒ってるのだろうか。なんで俺が野球をしないことで宇野が怒るのだろうか。俺は疑問を感じながらも学校へ向かった。

学校へ着き教室に入ると、西城と長瀬、そして白石のいつものメンバーが固まって話していた。俺もそこに加わった。話題は土曜の試合の話だった。後になって知った事なのだが、あれは大会ではなく練習試合だったらしい。たかが練習試合であの盛り上がりは、さすが名門といったところだろうか。

そうこうしているうちに先生が来て朝礼が始まった。さつきも宇野が言っていたが、今日は仮入部の日だ。1年は全員何かしらの部活にいかねければならない。先生は一通りの説明をすると、仮入部の紙を配った。前から配って来た紙を俺は後ろに回し終わるとその紙を見た。さまざまな部活がある。サッカー・バスケット・バレーボール・弓道。野球部の文字も見える。その欄の一番下に、「アメフト部」という文字も見つけた。所詮仮入部だ。どれでもいいと、適当に迷っていたのだが横から強い視線を感じた。西城だ。アメフトを選べとばかりに俺を見つめている。俺は仕方なくアメフトの欄に丸として紙を前へと持っていった。先生はそれを全部回収して数を確認して封筒に入れた。

俺はチャイムの音と同時に目が覚めた。気持ちい浜風が窓から吹いている。どうやら寝ていたらしい。なぜ窓側かというと、一時間目の英語の時間に平賀先生がめんどくさそうに席替えをしたからだ。本人はしたくなかったようだが、クラスの女子に頼まれたのだろう。俺は運良く窓側の一番後ろの席をGETした。俺はこの気持ちい席で、日向ぼっこをしながら寝ていたというわけだ。起きるやいなや、学級委員長の高瀬に怒鳴られた。金曜日に決めたクラス委員で高瀬は学級委員長に立候補したのだ。男の方は白石だ。まあどちらも無難な感じだ。

俺は怒る高瀬を必死になだめた。運良く終礼をしに先生が来たので助かった。先生は今日の仮入部の説明をもう一度めんどくさそうに説明して、今日の授業は終わった。

俺は本当は少し変わった夢をみていた。俺がアメフトに入ることが美穂に伝えた夢だった。美穂は怒ることもなく、「頑張ってる」と一言笑顔で言っただけだった。その笑顔は、何か、美穂の本当の笑顔ではないような気がした。

どうしたものか。まあどうせ仮入部。本当に入部するわけじゃない。

俺は西城たちと一緒にアメフト部の説明がある教室へと向かった。

第九話：仮入部（後編）（前書き）

お詫び

お詫び

作者の手違いにより違う話と置き換えてしまいました。

本文とは違う話になってしまっていますがご了承ください。

早急に修復いたしますので今しばらくお待ちください。

第九話：仮入部（後編）

俺たちは2年2組の教室へ向かった。西城はテンションが今日はやけに高い。長瀬はいつもと変わらずニコニコだ。白石もいつもと変わらない。

俺たちは教室の扉を開けて中に入った。前の席に一人男子生徒がいた。

「なんだ、宙ひんだけか？」

西城が話しかけた。宙は黙ったまま首を横に振り、教室の後ろを指差した。そこにいたのはドレット頭の生徒だった。イヤホンを耳につけて目を閉じて音楽を聴いていた。

「先輩か？」

白石が宙に聞く。宙はまた首を横に振り、

「同じクラス」

と言った。口数の少ないやつだ。それにしても後ろに座ってるのはとんだヤンキーだ。

「お前と同じ、高校からここに来たやつみたいだな」

白石は俺の肩を叩いて席についた。俺は宙とやらに自己紹介をした。宙はコクンと頷うなづき、

「浪翔宙なみしよ、よろしく」

ショートでさらさらの髪の毛が揺れている。俺は宙の横に座った。すると長瀬が、

「そうだ、仁君も宙に占って貰ったらいいんじゃない？」

長瀬が俺の方を見る。

「そうだな、一度やってみて貰ったらいいんじゃないか？」

西城も賛成した。俺は宙に「いいのか？」と聞いてみた。すると宙はまたコクリと頷き、ポケットからカードを取り出しシャッフルしている。おそらくタロットカードだろう。宙は何やらいろいろ順序を踏んでいる。そして一枚のカードを俺に渡した。

「正位置の魔術師」

宙はそう言った。そして続けて、

「物事の始まり、起源。創造を意味する」

宙が呟いた。その瞬間教室の扉が開いた。入ってきたのは眼鏡をかけた人だった。そのまま教卓へ行き、ゴホンと咳払いをして黒板に名前を書いた。実に達筆な字だ。

「えーっと、みんなよく集まってくれたね。僕は部長の佐藤、ヨロシク。」

本名は斉藤栄一。黒板の達筆の字が眩しく見える。

「今日は一応部活が休みだから僕しかいないんだけど、部員は2年生だけなんだ。僕を含めて5人。君たちが入ってくれば試合できる人数になる」

佐藤先輩は嬉しそうにそう言った。

その後も長々といろいろ説明してくれた。まだ公式試合は出たことがないらしい。俺たちが入れば初の公式戦になるのだろうか。

「ところでみんな、体操着は持ってきてるかな？」

俺は頷いた。西城も、「ウィーツ」と言って大きく手を上げた。

「そっちの君は持ってきてるかな？」

佐藤先輩がドレッド頭に聞くが、音楽を聴いていて聞こえていないらしい。すると西城が立ち上がりドレッド頭の前に立ち、イヤホンを無理やりとった。

「部長が話してんだ、ちゃんと聞けよ」

ずっと閉じていた目を開けて、西城を睨み付けた。西城も負けずと睨み付ける。

「あ、えっと、名前はなんていうのかな？」

一発触発の雰囲気佐藤先輩がなんとか抑えた。ドレッド頭はイヤホンを鞆にしまい、

「六條。六條^{むじおし}皐月や」

六條皐月。皐月とは変わった名前だ。

「六條君は体操着持ってきてるかな？」

佐藤先輩が聞くと、

「今日は持ってきてないんで帰りますわ」

そう言つて教室を出て行つた。少し嫌な空気が流れたが、

「じゃあ、みんな着替えたら運動場に集合」

俺たちはそのまま更衣室へ向かつた。西城はずっとイライラしている。俺達はそんな西城を宥めつつ、着替えを済ませ運動場へ向かつた。運動場ではほかの部活も練習をしている。佐藤先輩が手を振つて呼んでいる。俺達は足早に向かつた。

「まずは基本的なキャッチボールから始めようか。あ、でもまづ少しアップしようか」

そう言つて体操とグラウンドを5週走つた。それからパス練習を始めるらしい。ボールに慣れることが大事らしい。西城は白石、長瀬と宙、そして俺は佐藤先輩とすることとなつた。俺はボールを持った。美穂の家にあつたのと同じ大きさ。以外に小さく、投げやすそうなボールだ。

俺は大きく振りかぶつて投げた。ボールは変な回転をしながら佐藤先輩のところへ飛んでいった。

「ナイスコントロール。でも回転はそうじゃなくて・・・」

佐藤先輩がボールを投げた。ボールは綺麗な回転をして俺の方へ飛んできた。綺麗な回転だ。おそらく空気抵抗が一番少ない回転だろう。

「初めは難しいと思うけど、QB以外はあまり意味ないんだけどね」俺は意識して投げてみた。するとさっきよりはマシな回転で飛んでいった。

「お、上手い上手い」

佐藤先輩が褒めてくれた。やはり褒められると嬉しい。先輩は少し後ろに下がって投げた。ボールは俺の頭上を越えて飛んでいった。ボールは不規則に転がっていく。後ろで謝っている先輩に頭を下げつつ、俺はボールを取りに行った。結構転がった。先輩までの距離は50メートルくらいの距離だ。野球ではこんな距離どうってことはない。俺はボールを握った。するとレースみたいな指を掛けるところがあつた。俺はそこに指を掛け、思いつきり振りかぶって先輩の方へ投げた。するとボールは綺麗な回転で先輩の胸、ド真ん中ストレートの位置に届いた。意外と綺麗な回転だった。思いつきり振りかぶってもたかが50メートル。野球ならまだ伸びるだろうなと心の中で思いつつ、小走りに先輩の所へ向かった。すると先輩が、

「す、すごい！！今のすごかったよ！あんなの見たことないよ！」

えらく興奮している。何をいつたい興奮しているのだろうか？回転なら先輩のほう綺麗なだし、距離もたかが50メートルだ。

「へへ、さすがは全国区のピッチャーだな」

西城が口を挿む。

「今のはすごいよ！あんな距離をこんなにも正確に投げる人なんて全国でもそういないよ！」

部長は興奮しっぱなしだ。俺は少し褒められたことが照れくさかった。

その後も部長からいろいろな知識を教えてもらった。そして時間が来て今日は解散となった。俺達は着替えを済ませ、坂を上り家へと帰った。

「しかしお前のあのパスはすごかったな」

白石が言う。

「うんうん、さすがは元全国区のピッチャー。さすがだね」

長瀬も褒める。

「お前QBに絶対向いてるって！！」

西城が俺の頭をクシャクシャに撫でる。俺はその手を振り解き家へと帰った。

QB、俺に向いているポジション。

第十話：恥ずかしがり屋（前書き）

前回のあらすじ

仮入部でありえないほどの投球をみせた仁。それを見た部長の佐藤は大はしゃぎ。西城たちからQBに向いていると言われ、考える仁であった。

高校生の恋と青春を描いた青春ラブストーリー。

第十話：恥ずかしがり屋

仮入部期間も終わり、4月も今日で終わる。満開だった桜の木も、少しずつ散り始めている。5月に入るとゴールデンウィークがイベントとしてある。大して予定もない俺には暇で暇で仕方がないのだが、まあゆっくりできるので良いとしよう。

気持ちの良い風が吹いている。窓際の席を獲得できて良かった。授業も6時間目にもなると満腹感から生まれる睡魔との戦いになってくる。西城なんて横でグースカ寝ている。

クラスの様子はと言うと、平和なクラスだ。何せ委員長があの高瀬だ。自然と纏まりまとが出てくる。委員会だが、俺はというと図書委員になった。まあこれは西城と白石のせいなのだが、まあまだマシな委員の方だ。

窓から外を眺めていると前から声がした。

「今日の放課後の図書会議なんだけど、どこでやるか知ってる？」

宇野あゆみだ。こいつも俺と一緒に図書委員だ。こいつの方は自ら望んで選んだようだ。

「多分図書室じゃねえの？図書委員だし」

宇野はクスツと笑い、

「そんな単純なわけないでしょ。生物教室よ」

宇野はそういつてまた前を向いた。知っているなら聞くな。そう言いたかったが心の中で小さく呟いた。そして俺はまた外を眺めた。

チャイムが鳴り放課後になった。俺は宇野と共に生物教室へ向かった。なぜ図書委員が生物教室で会議を開くのだろうか。俺はその事を疑問に思いながら宇野の後を付いて行った。

生物教室に着いて扉を開けて中に入ると、他の委員の人たちが座っていた。俺たちは教室の後ろ側に座った。まだ先生は来ていないらしい。

宇野が前に座ってる子に話しかけた。

「やっぱり静香も図書委員だったのね」

前の子は振り返りコクンと頷いた。黒髪で前髪を下ろしてあまり顔が見えない。

「あれ？もう一人は来てないの？」

宇野が質問をする。

「・・・用事があるから帰るって・・・」

小さな声であまり聞き取れなかった。物静かな感じの子だ。チラッと目があった。俺は軽く会釈をした。すると下を向いて俯うつむいてしまった。

「あゝこの子極度の恥ずかしがり屋だから簡便してあげて」

まあ感じを見ているとそういうことだろうとはわかる。まあでも一応自己紹介はしておこうと俺は話しかけた。

「あ、えっと、3組の橘。ヨロシク」

彼女はずっと俯いたままである。しかし少し顔を上げて、

「……えつと……河北 静……」

河北というらしい。河北はまた俯いたまま前を向いた。先生が来たからだ。宇野が横で笑いながら見ている。

「まあ恥ずかしがり屋だから」

すぐに終わると思ってだったが、意外と長かった。やっと終わって時計を見てみるともう5時だった。帰りに海山神社に寄ろうと思っていたが諦めるしかない。宇野は河北と一緒に終わったらすぐに足早に帰っていった。俺もそろそろ帰ろうかと下駄箱に行くと美穂がいた。美穂は手を振ってる。

「どうしたんだよ？お前も委員会か？」

俺は靴を履きながら聞いた。

「ううん、私は部活。部活が終わって帰ろうと思ったらあゆみちゃんがいる、仁君が同じ図書委員だって言ってたから待ってたの」

美穂は笑顔でそう言った。

「そっか……ありがとう」

美穂は「いいよいいよ。」と喋って微笑み一緒に外へ出た。外は夕焼けで茜色に輝いていた。美穂とこうやって二人で歩くのも久しぶりだ。

「仁君が図書委員なんてなんかイメージじゃないね」

その意見には激しく同意だ。何せ嫌々西城達にやらされたようなものだ。

「まあどうせあんまやることねえしテキトーにやってりゃ大丈夫だろ」

「あ、ダメなんだ。ちゃんとやらなきゃダメだよ。あゆみちゃんに困るでしょ」

美穂は頬を膨らませて俺を押しした。俺は仕返しに押ししてやるうとしたが、美穂はそれを避けて走って坂を上り上から、

「べっつだ。仁君なんかにつかまりませんよっつだ」

美穂は笑顔で舌を出していた。美穂の後ろからは茜色の夕日の光が眩しいくらいに光っている。

「家まで競争だ」

美穂は走って坂道を登っていった。俺は後を追って走って坂道を登っていった。

家についた俺はヘトヘトだった。まさか麓の辺りからここまでノンストップで走るとは思わなかった。毎日早朝ランニングをしていても流石にこれはキツかった。俺は風呂に入ってジャージに着替えた。これから海山神社まで走りに行くからだ。なぜかというところ今日の朝は寝坊して早朝ランニングに行けなかったからだ。

俺は家を出て走り出した。同じ道を走っていても、朝と夜とでは道の表情も全く違う。俺は夜のランニングコースを楽しみながら海山神社を目指して走った。

海山神社に着いて、長い石畳を走っていくと、売り場の電気がついていて。楓さんだろうか？俺はノックをして中に入った。

「失礼します」

中には楓さんがいた。そしてもう一人見覚えのある人がいた。前まで垂らした黒髪。そう、今日会った河北だった。

「今日は朝寝坊して行けなかったので夜にランニングですか？」

楓さんはニコリと笑い座布団を出してくれた。

「え？なんでそれを・・・？」

なぜ朝寝坊したことを知っているのだろうか？

「それは私が巫女さんだから・・・」

楓さんは笑顔でそういってお茶を入れてくれた。巫女さんだからわかるっていうには納得できなかったが楓さんの笑顔を見るとそんなことどうでも良くなった。

「二人は知り合いなの？」

楓さんが俺と河北の顔を見て聞いた。河北はコクリと頷き、俺は今日図書委員で出会ったことを話した。

俺はその後もう少しの間楓さんと話していた。河北とは会話が無く、俺たちの話をただ聞いていた。話によると、河北は楓さんの所属するオカルト研究会の部員らしい。今日は借りていた本を返すべくここに来たということらしい。

話も大分弾んだのだが、時間も遅くなってきたので今日は解散ということになった。外に出ると辺りは暗くなっていた。

「大分暗くなってきましたね」

楓さんが呟いた。

「静香ちゃん、帰れる？」

楓さんはそう言って石畳の方を見た。そこは薄暗い先の見えない石畳が続いていた。俺と河北も石畳の方を見た。河北は苦笑いだ。

「大丈夫ツスよ。俺が家まで送りますよ」

俺はこつこつ暗いところは平気な方だ。

「なら、お願いするわね。静香ちゃん、何かあったら橘君に助けてもらってね」

楓さんはそう言って微笑んだ。

俺たちは楓さんに見送られ、暗い石畳を歩いて行った。しかし本当に真っ暗だ。自分の足元がギリギリ見えるくらいで、これは他の

意味で少し危ない。河北は恐る恐る俺の横を歩いている。

「そんなにビビらなくて大丈夫だって。お化けなんて出や・・ッ！」

俺がしゃべろうとした時横でカラスが飛び立った。俺もこれには少し驚いた。しかしすぐ平常を取り戻した。しかし俺の左腕が少し重たい。横に目をやると河北が俺の腕にしがみ付いている。河北は背が低いので本当にしがみ付いた感じた。怖がっていた河北だったが我に帰って俺の腕から離れた。顔を赤くして声を出さずにペコペコ頭を下げている。

「あ、えっと、いや、別にいいよ、腕ぐらい」

恥ずかしそうな河北を見ているこっちも少し恥ずかしくなった。

「怖いのは仕方ねえことだし・・」

俺はそういつてまた歩き出した。すると河北は俺の腕を掴んできた。よほど怖いらしい。怖くて体温が上昇しているのだろうか河北の体は暖かかった。そうこうしているうちに鳥居まで来た。鳥居までくればあとは民家の光があるので意外と明るい。

俺が、「ここでもういいのか？」と聞くと、河北は、「ここまでで十分」だと俺に気を遣ってか手を顔の前で横に振った。本当に大丈夫だろうか。河北はわかれ際に、近くに来て、「ありがとう」と言って帰っていった。

その後俺はまた走って家まで帰った。

家に着いてから俺は急に恥ずかしくなった。今考えると異性とあんなに密着していたと思うと恥ずかしくて顔が火照った。それを見ただじんちゃんが、

「なんじゃ、お前酒でも飲んだんか？」
と聞いてきた。

俺は夜寝るまで火照りっぱなしだった。

第十一話：明星のエース（前書き）

前回のあらすじ

図書委員の会議に行った仁は、恥ずかしがり屋な河北静香に出会う。その静香と夜の海山神社で急接近したことを家に帰って恥ずかしがる仁であった。

高校生の恋と青春を描いた青春ラブストーリー。

第十一話：明星のエース

俺はいつもより早くに目が覚めた。夢に河北が浮かんできたからだ。昨日の事もあってかどうも意識してしまつらしい。俺はカーテンを開けにベットから立ち上がった。すると何かを蹴つたようだった。足元に目をやるとそこにはアメフトのボールが転がっていた。年代物の使い込まれたボールだ。幸恵さんに借りたものだった。俺がアメフトをするということなので幸恵さんが貸してくれたのだ。幸恵さんは、「毎日触つて手に馴染ませることね」と言つて俺に手渡してくれた。俺はそれから暇な時にはボールに触ることにしている。

「なんじゃ、起きとつたんか」

ばあちゃんが二階へ上がってきた。物音で気づいたのだろう。この時間にはもうばあちゃんとじいちゃんは起きている。

「今日から連休じゃろう？まあゆっくり寝てればよかつたのにのう」
ばあちゃんはそう言つて降りていった。せつかくの休みなのに随分早起きをしてしまった。俺はカーテンを開けて窓を開いた。朝日が照つて、綺麗な景色が見える。深呼吸してベットに戻ろうとしたら外から声がした。

「いってきまゝす」

美穂の声だ。窓から下を見てみるとジャージ姿の美穂がいた。

「ランニングか？」

俺は美穂に声をかけた。すると美穂は大きく手を振って、

「あ、おはよ〜仁君〜、早起きだね〜」

それは一緒である。

「あ、もう時間ないから行くね。じゃ〜ね〜」

美穂はそう言って坂を降りていった。俺もそろそろお腹が空いて来たので1階へ降りて朝食を食べることにした。

朝食後、俺は服を着替えていた。今日は市内までCDを買いに行くことにしていたのだ。休みがないと市内に行くことなんて滅多にない。無論、碧山町にCDショップなんてものはない。なので休みを使って買いに行くというわけだ。

服に着替えて、お金を持って俺は家を出た。すこし日差しが暑い。もう五月だ。俺がここに来て、丁度1ヶ月くらいになる。この町にも少しづつ慣れてきた。

西城たちは休みをどう過ごしているのだろうか。おそらく西城の家でゲームだろう。あいつらの休日の過ごし方は大抵そんなとこだ。俺は駅に着くと、切符を買って電車を待った。1日5本しかない電車だ。乗り過ぎすと致命傷だ。

電車が来て、俺は乗り込み、席についた。長期の休みとあってか前に乗ったときよりは人が多い。しかしそれでも8人程度だ。2両編成で8人は少ないだろう。

碧山町駅を出るとトンネルがある。トンネルを抜けると海岸沿いを走っていく。正に海の上を走る電車だ。

電車に揺られること15分。市内の駅についた。電車を降りて改札を通ると、目の前に人込みが広がっていた。これが休みの日の町の姿であろう。俺は人込みに揉まれながら目的地のショッピングモールへ向かった。人々が楽しそうに行き交う。

俺はショッピングモールへ着くと、真っ先にCDショップへ行った。目当てのCDがあればいいのだが。俺は、真っ先に洋楽の棚へ向かった。俺は音楽鑑賞が趣味なのだが、洋楽がその中でも特に好きだ。俺は目当てのCDを買い、CDショップを後にした。せっかく市内まで来たので、ただCDをかうだけじゃ勿体無い。俺は辺りを散策することにした。

ショッピングモール内も散策し終わり、外に出て近くの商店街を歩いていた。賑やかな商店街だ。食べ物や服、色々な物が売っている。その中に一際俺の目を惹いた店があった。スポーツ店だ。それほど大きくなく、個人まりした店だ。俺は中に入った。サッカー・野球、バスケットにバレー。いろんな物が売っている。

「いらつしゃい。何かお求めかな？」

店の人が話しかけてきた。中年の男性だった。体格はいいほうだ。店員はこの人だけらしい。

「いえ、ちよつと見に入っただけで・・・」

別に目的が無かったので、俺はそう答えた。

「そうかい。まあ見てってくれや」

俺はブラブラ店内を見て回った。するとレジの後ろにアメフトの選手のパスターが貼ってあった。俺は近くに行き眺めていた。

「お、なんだアメフトに興味があるのかい？」

おじさんが話しかけてきた。まあ興味がないわけではない。

「こいつはオーシャン・ソニックスのポスターよ。そこに写ってるのはこのチームのエースだった片山俊一だよ」

俺は耳を疑った。片山俊一、美穂の父の名前だ。プロでアメフトをやったことは前に幸恵さんから聞いていた。

「いい選手だったんだがよ、交通事故で10年前に亡くなったんだよ。日本のアメフト界を背負って立つような若者を亡くすのは惜しいことだがな。アメフトのもんならその棚にあるよ」

おじさんはそう言って新聞を読み始めた。俺はしばらくポスターを眺めて、アメフトのある棚へ向かった。そこには制服姿の男が立っていた。学ランではなくブレザーだ。私立だろうか？アメフトの用品を見ているということはアメフトをしているのだろうか。俺はその男が持っている鞆を見た。

「Myoujou American Football Club
」

鞆にはそう書かれていた。明星といえば俺が試合を見に行った時にやっていたチームだ。突っ立って見ている俺に男は話しかけてきた。

「何か用かい？」

俺は我が目を疑った。顔をあげたその顔は、以前試合を見に行った

時にMVPを獲っていた雛形だった。

「あ、いや別になんでも・・・」

まさかこのような所で出会うとは思わなかった。

「君もアメフトをやっているのかい？」

雛形は聞いてきた。

「まあ・・・一応」

まだ部活に入ったわけではないが、まあ嘘ではないだろう。

「ほお、見たところ高校生くらいか。どこの高校だい？」

雛形は俺の全身、服装などを見て聞いてきた。

「碧山高校ツス」

俺が答えると、雛形はクスツと笑い、

「碧山高校か。でも今アメフト部は人数がないんじゃないのかな？」

なんでコイツが知っているのだから？確かに試合できる人数じゃない。

「古豪と呼ばれた碧山高校も落ちたものだね。まあ試合ができる人数がいても僕たち明星学院には勝てないよ。まあ無論、ここだと広

稜工業を倒さなければならぬけどね」

俺はイラツときた。確かに明星や広稜工業は強い学校だ。しかしこうまで面と向かって言われるとむかついてくる。

「今年は碧山高校が関西地区トップの座を貫きますよ」

俺は後先考えずに言い切ってしまった。まだ仮入部の俺が、大阪地区の覇者に宣戦布告をしたのだ。

「ほお、古豪復活というわけか。おもしろい。ならその実力とやらを見せてもらおうか」

雛形は笑みを浮かべ、店のおじさんの元へ向かい、

「おじさん、商店街のグラウンドを貸して頂けませんか？」

単刀直入に言った。

「薫君、こつちへ帰っていたのかね。グラウンド？構わないよ。これが鍵だ。終わったら返しに来てくれ」

そういっておじさんは鍵を雛形に渡した。雛形は、「着いて来たまえ。」と店を出て行った。

店を出て裏の小道を進んでいくとグラウンドがあった。結構大きなグラウンドだ。野球もできるような設備もある。多分商店街の草野球チームの練習場だろうか？

雛形はブレザーの上着を脱ぎ、鞆からアメフトのボールを出した。

「君のポジションは？」

雛形が聞いてきた。正直仮入部の俺にはポジションとかよくわからなかった。

「RB。俺はRBです」

俺は思わずそう言った。確か雛形のポジションもRBだった気がしたからだ。

「奇遇だな。僕のポジションもRBなんだよ」

雛形はそう言ってグラウンドの端に行き線を書いて戻ってきた。

「ここからあの線まで約60Mある。ここから走ってお互いDFを抜いてあそこまでボールを運べば勝ち。DFは相手を止めれば勝ちだ」

雛形はそう言ってコインを投げて手の甲で伏せた。

「さあ先攻後攻決めようか」

俺は後攻をとった。雛形のスタート地点から10メートルくらいの距離を取って構えた。DFの仕方もよくわからない。とにかく相手を止めればいい話だ。

「それじゃあ行くよ」

そう言って雛形は走って来た。かなりのスピードだ。俺は腰を低くして構えた。雛形は俺の真正面に走ってきた。俺は手の届くところまで来た雛形に向かって手を伸ばした。しかし次の瞬間雛形はするり

と回転して俺を抜き去った。あつという間だった。確かに手の届く範囲だったので手を伸ばした。しかし触れることすらできなかった。向こうまで走って、雛形は帰ってきて俺にボールを渡した。

「まずは僕の勝ちだ」

俺はスタート地点にいきボールを握った。ボールの掴み方は前に佐藤部長から聞いていた。俺は全速疾走で走った。真正面でなく斜めに走り、広いコートを利用して横から逃げ切ろうとした。俺は全速疾走で走りぬけようとしたので雛形に目をやる暇なんてなかった。すると横から猛烈にタックルを喰らった。俺は倒れこみ、ボールは雛形の足元へ転がっていった。

「大丈夫かい？君は本当にRBかい？今の程度のタックルでボールを離しちゃだめだよ」

雛形はそういつてまたスタート地点に戻った。

俺はそれから何回も雛形に挑んだ。しかしあいつを止めることも抜くこともできなかった。

「さあこれが最後の君の攻撃だよ」

丁度これで20回目だ。体のあちこちが痛い。息も乱調だ。それなのに雛形は平然な顔をしている。俺はスタート地点に着き、深く深呼吸した。そしてボールを強く握り思いっきり振りかぶった。

「何をする気だ？」

俺は全力の力を使ってボールをゴール目掛けて投げた。ボールは綺麗な回転をして飛んでいく。

「ふっ、抜けないなら上を越えるところわけか、しかしそこからゴールまでは60メートル、58Yはある。届くわけが・・・」

ボールはゴールのあるグラウンドの端のネットに突き刺さった。俺はそれを見た瞬間目の前が真っ暗になった。

俺は夢に魘うなされて目が覚めた。気が付くと俺のベットのの上だった。なぜ俺は家に戻ってきているのだろう。確かCDを買いに行つて、それでスポーツショップで・・・。そうだ明星の雛形と勝負をしていたのだった。俺は一階へ降りた。するとじいちゃんがテレビを見ていた。

「お、気が付いたか」

じいちゃんが俺に気付き振り返った。

「なんで俺家に・・・?」

するとばあちゃんが後ろから、

「お前さんが倒れたってさっき沢村さんというスポーツのお店の人が運んでくれたんじゃないよ」

そうか、俺は勝負の際に倒れたらしい。それであるスポーツショップ

プのおじさんがここまで運んでくれたわけだ。

「まったく世話の焼ける奴じゃわい」

じんちゃんが俺をからかった。俺は頭をかきながらまた二階へ戻った。試合にも負けて、なおかつ倒れるなんて。まったく恥をかいってしまった。雛形に合わせる顔がない。

俺はその後、風呂に入って寝ることにした。

「おかえりなさい」

沢村が帰って来た。

「ちゃんと届けてきたよ」

「ありがとうございます」

雛形が頭を下げた。

「しかし何をしたんだい薫君。素人相手に強烈なタツクルをしたんじゃないのかね？」

雛形は申し訳なさそうに、

「まさか素人だとは。しかし最後のあの投球。あれは素人ができるようなモノじゃない」

雛形は険しい顔をしている。それを見た沢村は、

「何があつたんだい？」

新聞を片付けながら雛形に聞いた。

「いえ、別に。今日はありがとうございました。では僕はこれで」

雛形は会釈をして店を出た。

「名前を聞いたければ良かったな。碧山高校しかまだわからないが、しかしあのパス……。60Yのパスを素人が……。面白い」

雛形は商店街へ消えていった。

第十二話：学級委員長（前書き）

前回のあらすじ

休みを利用してCDを市内に買いに来た仁。商店街のスポーツショップ沢村で、明星のエース雛形と出会う。そして勝負することとなった二人。結果は雛形の圧勝。しかし最後の攻撃で60Yの投球を見せた仁。それを見た雛形は仁に期待の色をみせる。

高校生の恋と青春を描いた青春ラブストーリー！。

第十二話：学級委員長

俺はいつものように早朝ランニングを済ませ、朝食を食べていた。

「お前さんもよう頑張っとるの。三日坊主にならんでよかったよかった」

じいちゃんが新聞を読みながら、朝食を食べている俺に話しかけてきた。

「あたりまえだろ。俺はやるときゃやるっての」

「そんなことより早よお食ってくれんか？もう10時じゃぞ？洗い物が終わらんでのお」

ばばちゃんが急かす。ばあちゃんの味噌汁は最高に美味い。俺は綺麗に食べ終わり二階へ上がった。昨日は散々だったが今日は暇な一日になりそうだ。俺はやることもなく勉強机に座って外の景色を眺めていた。昨日買ったCDをコンポに入れて、音楽を聴きながら景色を見た。俺の頭の中には昨日のことが過ぎっていた。見栄張って、「関西地区を制覇しますよ」なんて言って、ボロ負けだ。情けないにもほどがある。しかし、流石は明星のエースだ。俺は関心と屈辱の二つの思いに駆られていた。俺は机の上にある本に手をやった。

「アメフト入門 これを見れば誰でもアメフトを理解できる本」

この前ようやく本屋に届いたのを取りに行ったのだ。俺は本を開きいろいろ見ていた。目次にはいろいろな項目があった。「RB」、

俺はそのページを開いた。雛形のポジションだ。ページにはRBの説明が載っている。

「足の速さが重視されるのだが、タツクルに負けないタフネスも求められている。パワーを活かして突進するタイプや、小回りの良さを活かして相手のタツクルをかいくぐるタイプなど、選手ごとの個性が光るポジションである」

そう書かれてあった。まさにそれをお手本としたようなやつだった。足のスピードも速かったが、何よりその体の強さと柔軟な体は凄まじかった。俺のタツクルなんて殆んど効いていなかった。俺はまた目次に戻った。「QB」、確か西城が俺に向いていると言ったポジションだ。俺はページを開き説明欄を読んだ。

「攻撃の司令塔。クォーターバックは視野の広さ、戦術眼、判断力等が問われるので、肩は必ずしも強くなって構わないが戦術の遂行力を考えると肩が強いに越した事はないだろう。ただし、パスを投げられない状況に置かれると自ら走ることもあるので、ある程度の機動力ないしは走力も必要となる」

攻撃の司令塔。チームの柱となるべきポジションだ。視野の広さや決断力。俺には乏しい能力だ。肩の強さなら多少は自信があるのだが、それでも軟式ボールのように遠くまでは飛ばせない。前に試合を見に行った時に白石がいろいろ説明してくれたが、アメフトには個性のあるポジションが多い。今まで野球しかやってきてなかった俺が大丈夫なのだろうか。俺は外を眺めた。すると急に後方から声がした。

「へ〜意外と片付いてるんだね〜」

俺は振り返った。そこには美穂が立っていた。

「な、おい！　なんでお前がココにいんだよ！」

俺は慌てて本を隠した。あいつに見られると厄介事になりそうだ。

「門おばあちゃんが勝手に上がっていいよって。ん？　今何隠したのかなあ〜？」

ばれたか？　俺は立ち上がって美穂に言い返した。

「な、なんでもねえって！」

美穂は怪しそうに俺に顔を近付けて来た。

「ほんとに〜？　エッチな本とかじゃなくて〜？」

俺は後ずさりをしながら机から離れた。すると美穂が下にあつたC Dに足を引つ掛けて倒れ込んできた。俺も美穂に押されてベットに倒れ、美穂はその上にのしかかって来た。

「いつてえ……。んたく……」

俺が目を開けると、美穂の顔が真ん前にあつた。美穂の息の音が聞こえる。俺はそのまま固まってしまった。

「い、いめさ」

美穂は謝るが退こうとしない。すると階段の方から声がした。

「あなた達なにやってるの？」

美穂は急いで俺の上から降り、俺もすぐに起き上がった。階段の方に目をやるとそこにはお盆にお菓子とお茶を乗せて立っている高瀬がいた。

「な、なんで高瀬がここにいるんだよ！」

俺は気が動転していた。

「別にいいじゃない。あたしが居ちゃだめだわけ？」

高瀬はお盆を机に置いて腰に手を当てて俺の方を見て言った。

「片山さんに借りていた参考書を返しに来たのよ。そしたら片山さんがあなたの家に行こうって言い出すから付いて来たの。そしたらあなたのおばあさんにこれを持って行くように言われたのよ」

高瀬はそういつて煎餅せんぺいを食べた。こいつはいつも怒っているイメージがる。今日もそんな感じだ。

「それであなた達何してたのよ？」

高瀬が目を細めて聞く。そういえば今日は眼鏡を掛けていない。コンタクトだろうか？多分眼鏡を掛けてない方が可愛くみえる。

「あ、いや、別に……。ただ美穂がこけたのに巻き沿いを喰らっただけで……」

高瀬は美穂を見て、美穂はコクリと頷いた。高瀬は、「まあいいわ」

といった顔をして勉強机に座った。美穂も床のクッションに座った。俺はベットに座っている。

「んで、美穂。何の用だよ？」

美穂はクッションを抱えている。

「別に用なんてないよ？ただ仁君の家に行こうって思ったから来ただけ」

美穂は微笑みそう言った。俺は少し照れくさく下を向いた。こいつの笑顔はいつ見ても反則である。

「それより橘君勉強してるの？」

高瀬は勉強机の上にある本を物色して言った。俺は一瞬ドキっとした。そこにはさつき隠したアメフトの本がある。せつかく乗り切ったのにここでバレたら意味がない。しかし高瀬はアメフトの本を見たが何も言わず、

「勉強の本全然ないじゃない。五月の終わりには中間考査もあるのよ？ちゃんと勉強しなきゃ、いくら佐伯中から来ても悪い点数とっちゃうわよ？」

どうにかバレなかった。気づかなかったのか？しかし正に痛恨の一撃である。やはり高校は中学とは違う。勉強のレベルも高くなるし、テストも簡単じゃないだろう。高校入試は中学レベルも問題で、どうにかやり過ぎしたが……。定期テストはそうもいかないだろう。

「大丈夫。もしわからなかったが私が教えてあげるから」

美穂はそう言っただけにピースをした。大丈夫なのだろうか・・・？
あまり頼りにならないそうに見えるのだが。

「剛なんて私がいくら言っても聞きやしないのよ？落ちこぼれていく一方だわ」

高瀬は西城と仲が良い。仲が良いと言うよりかは、いつも高瀬が一方的に叱り、西城は高瀬を一方的にからかう関係だ。

「高瀬は西城と仲良いよな？幼馴染なのか？」

俺は疑問に思っていたことを聞いてみた。すると高瀬が、

「誰が仲良いのよ！ あんな奴と仲良いわけないじゃない」

と、強い口調で返答した。

「え〜香織ちゃんと剛君はお似合いのだと思うけどな〜」

美穂が笑いながら言う。

「だ、誰があんな奴とお似合いなのよ！」

高瀬が慌てて否定する。俺と美穂は目を合わせてニヤリと微笑んだ。

「あ、あなた達何笑ってるのよ！」

高瀬は怒って煎餅をパリッと噛んだ。

その後俺達二人は怒る高瀬を宥めつつ、いろいろな話をして盛り上がった。そして時間もちよどお昼時に差し掛かり二人は家に帰るべく玄関を出た。俺も玄関を出て見送りに言った。外に出てすぐに、幸恵さんが買い物袋を持って坂を上ってきた。美穂はそれを見つけて幸恵さんの買い物袋を持ち、俺達に、「ばいばい」と言い、一緒に家に帰って行った。俺と高瀬は幸恵さんに会釈をして二人が家に入るのを見ていた。すると高瀬が、

「橘君、アメフト部に入るの？」

俺は驚いた顔をした。

「机に本があったから」

やはり気付いていたらしい。

「アメフト部に入るのはいいと思うけど、あの子の前でその話はない方がいいわよ。じゃ、また学校でね」

高瀬はそう言って坂を降りていった。高瀬も美穂の父の事を知っているのだろうか？美穂の父はこの碧山町では有名人だろう。知っているが当然か。

俺は複雑な気持ちだった。一度はアメフトに流れた俺の気持ちは、今の高瀬の一言でまたわからなくなった。正直、俺がアメフトをするのに美穂は関係ない。しかし、俺の心は迷っていた。

第十三話：秘密基地〜前編〜（前書き）

前回のあらすじ

家に美穂と学級委員長である高瀬が来た。突然の来客に戸惑う仁。分かれる際に高瀬に言われた言葉が頭に引っかかる仁。

高校生の青春を描いた感動ラブストーリー！。

第十三話：秘密基地〜前編〜

俺は家の前でリュックサックを持って座っていた。なぜ座っているかと言うと、話は昨日にさかのぼる。

「お、仁。買い物か？」

西城が後ろから話しかけてきた。

「ああ。まったく麓ふもとにしか店がないってのはどうかと思っぜ」

俺はばあちゃんに頼まれて切れた醤油を買いにスーパーに来ていた。そこに偶然西城とで出会わせたといいことだ。

「お前は何してんだよ？」

俺は西城に聞き返した。何やら大層な量のものを買っている。

「明日の買出しだよ。まあいろいろといんだけど・・・あ、そうだお前、明日から暇か？」

西城が荷物を自転車の籠に乗せて言った。

「ああ、どこもいかなえし家でのんびりしようかと」

そう言うと西城はニコリと笑い、

「明日から泊まりで出かけるぞ。」

そう言つて自転車に跨つた。いったい何処に行くのだろうか？

「荷物は・・・そうだな、寝袋とバスタオル、それと着替えなんかも持って来い。金もある程度持つてきとけよ」

寝袋？キャンプにでも行くのだろうか。首をかしげる俺とよそ目に西城はペラペラしゃべる。

「時間は・・・そうだお前家の前で待つとけ。幸一に迎えに行かすからよ。絶対来いよ、じゃあな」

西城はそう言つて、帰つていった。

まあこんなところだ。また行き先も聞かされずにいる。あいつらと出かけるときは毎回行き先を聞かされない。しかし今回はアメフトの試合を見に行くのではなさそうだが。俺はじいちゃんとはあちやんに泊り込みで出かけて来ると伝えた。

「おゝい橋。遅れてすまん」

白石が坂の下から歩いてきた。荷物は持つてなく手ぶらだ。俺が白石の様子を見てみると、

「あ、俺の荷物はもう置いてあるからな」

そう言つて俺の傍まで来た。

「いったい何処に行くんだ？　また目的を聞かされずにお出かけか？」

白石はまた坂を下りだして、

「付いて来たらわかるさ」

と言って、俺に手で付いて来いと指示した。俺は渋々白石の後を歩いた。麓まで降りるのかと思っただら坂途中の脇道に入ってしまった。本当に何処に行くのだろうか。この先は山、その先は崖だ。

俺は白石に黙々と付いて行った。白石が一方的に喋り、俺がそれに頷くといったパターンだ。俺たちは自然に出来たであろう山道を歩いて行った。本当にキャンプでもしに行くのだろうか？

「もうすぐ着くからな」

白石がそう言って少し小走りに進んでいった。俺は歩いてそれに付いて行く。すると俺くらいの背丈はある林を抜けるとそこには大きな穴があった。下を見ると遠くに地面がある。横にはロープと木で作った梯子はしこがあった。

「じゃあ俺が先に下りるから」

白石はそう言って梯子で降りていった。結構な高さはある。おそろしく洞窟だろう。

「早く降りて来いよ」

俺は白石に呼ばれ、梯子を降りていった。ギシギシきし軋む梯子の音は

少し恐怖感を仰ぐ。しかし俺は無事下に着くことができた。

「いったい何処に行くんだよ」

俺は白石にまた同じ事を聞いた。

「もうすぐだから待つてる」

白石は懐中電灯を点けて歩いていく。洞窟の高さは結構あり、2Mくらいだろうか。俺は辺りを見渡しながら白石の後を付いて行く。すると遠くに明かりが見えた。声も聞こえる。白石は懐中電灯の明かりを消して、明かりの方へと歩いていき、俺もそれに続く。明かりの元に行くとそこには大きな空洞があった。西城と長瀬もいる。眼前には海が見える。波が空洞の中にも入り、真ん中には池もある。池の上にはボートが浮いている。天井は高く、5M近くはある。

「やっと来たか。遅いっつうの」

西城がベットの上から吼える。ベットまである。よく見るといろいろな物が置いてある。まさに秘密基地だ。

「なんだよここ？」

俺は白石に聞いた。

「ここは俺たちの別荘だ。夏休みとか、長い休暇の時はここによく来るんだよ」

別荘……。しかしこんな場所をよく見つけたものだ。おそらく波の影響で自然にできたものだろう。空洞の入り口は俺たちが来た山

方面からと、池、池と言うよりは小さな浜辺の上に浮かぶ船で出て行けただろう。高さ5Mの入り口の向こうには青い空と青い海が広がっている。

「あ、仁。このことは他言無用だからな。誰にも言うんじゃないぞ」

西城がベットから降りて俺に言う。

「ああ、わかってるよ。それにしてもいいトコだな」

俺は辺りを見渡しながら言う。

「でしょ？ 喜んでもらえて嬉しいよ」

長瀬が笑顔で言う。

「そこが手を洗う場所だ。んで、トイレはねえからさっき来た道戻って、展望台のトイレを使うこと」

白石が説明してくれる。

それから俺はあいつらの説明を一通り聞いた。そしてまた夕方ここに集合ということに解散となった。一応ここは寝泊りできるところらしく、それまでは自由行動らしい。俺は西城に買出しを頼まれてスーパーに向かった。途中トイレの場所も確認した。入り口からそう遠くはない。俺は山を降りて、スーパーへと向かった。本当に不便である。ボートで海から行けば近いのだが、それでは人に見つかるということわざわざ坂でいかなきゃならない。俺が1人で坂を下っていると、前の方に塀の上の猫と睨み合ってる人がいた。何

処か見た横顔だ。近づいてみると、そこにいたのは河北だった。いったい何をしているのだろうか。塀の上の猫を見てみると紙を啜えている。俺は横から河北に声をかけた。

「おい・・・何してんだ？」

すると猫は驚いて逃げてしまった。河北は慌てて追いかけてよつとすがるが猫は逃げてしまった。河北は肩を落としている。

「わ、悪い。まさか逃げるとは・・・」

河北は俺に気付き、顔の前で手を横に振った。

「だ、大丈夫。また捕まえるから・・・」

可愛らしい声だ。以前よりかは顔を見て話せるようになっていた。

「何してたんだ？」

俺が聞くと、

「ううん、な、なんでもないです」

河北はそう言って微笑んだ。前髪が邪魔で顔をよく見たことはなかったが、意外と整った、綺麗な顔立ちだ。

「橘君は・・・今からお出かけ？」

河北は近づいてきてそう聞いた。

「いや、今からスーパーに買い物」

俺は少し歩きながら話した。

「私も、買い物に行こうと思ってっただの」

河北は俺の横を歩いている。

「なら一緒にいくか？」

河北は俯いたままコクリと頷いた。俺たちは坂を下っていった。それといった会話は無く、ほとんど無言の道のりだ。俺はそれを打破すべく声を発した。

「河北は、何処に住んでるだ？」

俺が聞ける精一杯の事だった。河北は俺の方を見て、

「え〜つと・・・お家」

と答えた。俺は一瞬固まってしまった。まさかの答えが返って来たからだ。

「そうだよな〜。家に住んでるに決まってるよな。俺何聞いてんだよ〜」

とっさのフォローだった。何処に住んでるって聞いて、まさかお家って答えが返ってくるとは思わなかった。河北も別にウケを狙ったわけではなさそうだ。

「河北、お前つてもしかして天然か？」

俺は率直に聞いた。すると河北は顔を真っ赤にして首を横に振った。なんというか可愛らしいやつだ。俺は思わず笑ってしまった。河北は笑う俺をポコポコ殴って来る。そうして歩いていると、前から美穂がジャージ姿で走ってきた。

「おゝ美穂、またランニングか？元気だなお前」

俺が声を掛けたが、美穂はチラッと俺の方を見て、無視して走っていった。なぜだ無視されたのか俺には全くわからなかった。河北を見ても、河北も首を傾げている。

俺たちはそのままスーパーに行き、お互いの買い物をして別れた。俺はずっと美穂がなぜ無視をして帰ったのかを考えていた。別に変なことを言ったわけでもない。気付いていないわけでもない。俺は坂を上って西城たちの下に戻る途中、ずっと考えていた。

第十四話：秘密基地〜後編〜（前書き）

前回のあらすじ

西城たちにまた行き先のわからないお出かけに誘われた仁。迎えに来た白石に付いて行き、仁は西城たちの秘密基地についた。そして晩御飯の買出し中に河北と出会う。楽しそうに河北と歩く仁をジョギング中に見た美穂は、仁の呼びかけに無視して行ってしまふ。それに不満を感じる仁であった。

高校生の恋と青春を描いた青春ラブストーリー！。

第十四話：秘密基地〜後編〜

『幸福とは主観的なものである。個人や個性の数だけ幸福は存在する。主観の価値観により、それが満たされているか否かで判断するものである』

「おい仁、お前も食べるよ。早くしねえと無くなっちまうぞ」

スナック菓子を食べながら西城が話しかける。

「俺はそんなに腹減ってねえから遠慮しないで食べていいぞ」

そう言うと西城は、ラッキーというような顔をしてお菓子を頬張った。俺はというと、買出しから帰って、岩の上で読書だ。しかし興味深い書物だ。

『幸福』

この本の題である。著者は、「J・クロスフォード」というアメリカ人。それを日本語で訳してある。これはさつきスパーで河北が貸してくれたものだ。あいつはいつもこんな本を読んでいるのだろうか。哲学的な本は難しい。しかし俺は自ずと読んでしまう。

『幸福を客観的に捉えることは困難である。客観的にそれが幸福で無い状況であっても、それはあくまでも客観的主観なわけであり、当事者が幸福だと感じていれば、それは幸福なのである』

なんとなく言いたい事はわかるような気もする。

「何読んでるの？」

長瀬が横に座った。

「あ、いや、さっき借りた本なんだけどな。ちょっと難しくてな」

長瀬に本を渡した。

「へへ橘君もこんな本読むんだね。哲学的な本は難しいのに」

長瀬が少し驚いた顔をしている。

「いや、こいつはさっき河北に借りたんだよ」

俺は長瀬からまた本を受け取った。

「河北さんから？河北さんと仲いいんだ橘君」

長瀬が横目で俺を見る。

「別に仲良いってほどのもんじゃねえよ！つか、お前も橘君じゃなくて仁でいいって言ってんだろ！」

俺は少し焦って長瀬に言った。君付けで呼ばれるのは何か恥ずかしい。それに仲がいいので仁でかまわない。

「えへだって仁って呼ぶの恥ずかしいじゃん」

そういうわりには別に恥ずかしそうでもない。

「仕方ないなあ。じゃあ仁君で」

長瀬はニコつと微笑み岩から降りて、「早く来ないとホントに無くなるよ」と言っつて西城たちの所に歩いていった。俺はまた本に目を向けた。

しかし考えてもみれば、幸福は本当に人それぞれ違うものだ。人それぞれの思いによっつていろいろなものがある。神社やお寺にお参りするのもそういつたものの延長なのだろうか。俺は本を閉じて岩から降り、西城たちの所へ行つた。

「お前が遠慮するなっつていつたからコイツ全部食つちまつたぞ」

白石が西城を目で指して俺に言う。西城は爪楊枝つまようじを咥えている。本当に全部無くなっつている。

「別にいいさ。別に腹減つてなかつたからな」

俺は白石の横に座つた。横では長瀬が何か大きな模造紙を持つてきた。

「なんだよそれ？」

俺は長瀬に聞いた。すると長瀬はニコつと笑い目の前に大きく開いて地面に置いた。

『2007年度第38回 アメリカンフットボール関西地区』

と書かれた紙だつた。紙にはトーナメント表が書かれていた。20

07年度、昨年の結果だろう。

「ここはこんな物まであるのかよ」

俺は白石に突っ込んだ。それはそうと、俺はアメフト自体最近知ったようなものだ。何処が強いとか全然わからない。俺はまた白石に説明してくれるよう頼んだ。

「高校アメフトの最高峰つてのはクリスマススボウルつて名前の試合だ。野球で言う甲子園つてとこだな。関西大会優勝校と関東大会優勝校の試合がクリスマススボウルつてわけだ。それでこの表は、関西大会の決勝トーナメント表だ」

白石が丁寧にまた説明してくれた。話によると、関西・関東の優勝校の最終試合がクリスマススボウルらしい。毎年2校、いや俺たち関西地区だと毎年1校しかでない。

「へ〜。関西だとどこが強いんだ？ やっぱ明星とかか？」

俺は聞いてみた。

「明星は去年は2位だ。まあ去年の関西王者は・・・」

白石が言おうとすると西城が啞えていた爪楊枝を吐き捨て、

「関工大附属だ」

そう言った。関西工業大学附属高校。関工大といえば、スポーツで有名な大学だ。プロ選手もあらゆる分野で排出している。その附属高校だ、当然と言えば当然だろう。

「あそこは最強だからね。あの明星が大差で負けたんだから」

明星が大差で負けるというのには少し驚いた。全く世界は広いものだ。

「今年はどうかわからないな、どこも強豪だ。関西大会の決勝トーナメントってのは8校で行われるんだ。大阪と兵庫は2校ずつ、後は各地区1校。大阪地区は関工大附属と明星学院、兵庫地区は広陵工業と神戸常盤学院。京都地区は新京大付属、滋賀地区は天津商業。広島地区は厳島高校、東海地区は名古屋工業だ。まあこんなところだな。アメフトはそんなに需要が多いわけじゃないから大抵同じ学校が毎年名を連ねてるってところだな」

どこも聞いたことのない学校だ。やはり附属高校は強いのだろうか。後、工業高校が名を連ねているのはやっぱり工業高校には男子生徒が多いからだろう。しかしまあ強そうな名前の高校ばかりだ。碧山高校も、これらの学校と肩を並べて名を連ねるのだろうか。しかしまだ俺は入部を決めたわけじゃない。

俺たちはそれからいろいろな話を話した。3人ともすでにアメフト部に入部する気であるらしい。こいつらは知識といい俺よりは遙かに上を行っている。俺なんか本当にアメフトをすることができるとはだろうか。

俺たちは飯の準備をすることにした。ガスコンロで今日は鍋だ。こんなところで鍋が食べれるとは思わなかった。料理をする一式はここには揃っていた。秘密基地というよりはほとんど別荘だ。俺は材料を切り、皿に盛り付けてテーブルに運んだ。地面が岩ということもあって敷物を敷いてもゴツゴツして痛いのが少し残念だ。今度座布団でも持って来ようと思った。俺たちは飯を食べながらまた

いろいろな話をした。「泊りの夜の話と言えば恋バナだ」そう西城が口走り話は始まった。恋の話と言うよりかは、引越してきた俺がどの子を可愛いと思うかの話と、ほとんど西城の楓さんへの愛の話だった。西城は本当に楓さんLOVEである。

「なあ、西城。お前高瀬とかどう思ってたよ？」

俺は率直に聞いてみた。この前高瀬が家に来たときには逆を聞いたからだ。

「香織？ あいつは駄目駄目。色っぽさが全然ねえよ。美山先輩と比べてみる。もう月とスッポンだ。あーりゃただのうるさい女だよ」

確かに色っぽさはないが割りと整った顔立ちだ。可愛くないわけじゃない。

「そう？香織ちゃんは可愛いと思うけど？それに剛にお似合いだと思っよ？」

長瀬が笑いながら西城に言った。しかし西城はチツチツと人差し指を顔の前で振り、

「レベルが違うっての。俺みたいなやつには美山先輩のようなおしとやかな人がお似合いなの！だから香織なんて眼中にナッシング」

お前みたいなやつには高瀬がお似合いだと心の中で突っ込みを入れた。話も弾み出したのだが、時間も遅くなり、俺たちは早めに寝ることにした。何やら明日は早くから出かけるらしい。俺は家から持ってきた寝袋に入り、デコボコの少ない岩場で寝ることにした。

俺は波の音で目が覚めた。辺りを見るとみんなまだ寝ている。それにまだ暗い。携帯を開いて時間を見るとまだ1時だ。俺はトイレに行きたくなり、懐中電灯を持ってトイレに向かった。暗い通路を抜けて梯子を上った。上り終えて空を見ると俺は鳥肌が立った。今にも降って落ちてきそうな数億もある星が浮かぶ世界が広がっていた。今、一人宇宙に来たみたいだ。俺は数分空を眺めていた。手に届きそうな星。こんな星空を見たら誰でも宇宙に行きたくなるだろう。俺はそう思った。しかしトイレに行きたいという欲求に負けて、俺は足早にトイレに向かった。そしてトイレを済まして、また来た道に戻り寢床へ向かった。

特別編・平賀健二了（前書き）

今回は、アメフト部顧問の平賀健一のストーリーです。ちょっとだけ美穂の父俊一との最後の夜のストーリーも描かれています。

特別編：平賀健二

俺の名前は平賀健二。41歳未だ独身。碧山高校で英語を担当している。そして今年の新入生、1年3組の担任だ。

俺は放課後、職員室で書類を整理していた。新入生の担任つてのはホントにめんどくさい。健康診断やらなんやらでこの書類の山だ。

「平賀先生、大変ですね。」

後ろを振り返るとそこには肩までの黒髪を靡なびかせる女性が立っていた。1年2組の担任の小林先生だ。歳は聞いたことがないからわからないが、おそらく30代だろう。世間一般でいう美人というやつだ。

「ホントですよ。めんどくさいったらありやしません。」

俺は書類を机に置き、背伸びをして欠伸あくびをした。

「あ、また平賀先生の悪い癖がでてますよ。ホントはめんどくさいのに口ではメンドクサイとか言っつて。勘違いされちゃいますよ。」

小林先生はそういつてクスクス笑いながら俺の方を見ている。

「されて結構。俺は他人にどう思われようが別に気にしませんしね。」

俺は鼻で笑った。それを見た小林先生は清ました顔で、

「そうですか。ならいいんですけど。」

と言って職員室を出て行った。なんとうか、俺にとっては苦手な先生だ。

俺は引き出したから封筒を取った。俺が顧問をしているアメフト部の仮入部希望者紙だ。6枚。今年は結構来たものだ。去年は5人入れるのにやつとこさ、今年は6人。まあこいつらが入ったら試合できる人数だが、入ったところで初心者。怪物みてえなんがいねえと全国なんて夢のまた夢。

俺は一枚一枚見ていった。初心者でも入ってくれるのは有難い。だが、また面倒が増えるだけか……。

「西城剛、中学時代はバスケット部か。ああ、あの馬鹿でかいやつだな。長瀬誠、白石幸一。こいつらは俺のクラスか。後、浪翔、六條。ん？橘？俺のクラスのやつか。確か野球で全国いったことがあるとか。なんとか自己紹介で言ってたな。橘、橘……。」

俺は1年3組の生徒詳細表を見た。

「橘仁、佐伯中出身。住所は……えらく上の方に住んでるんだな。保護者名……！」

俺は一瞬止まった。次の名前に見覚えがあつたからだ。

「門倉鉄夫。門倉。それにこの住所、みっちゃんの子か！」

俺は一人で盛り上がっていた。みっちゃんとは俺が高校時代碧山高校でアメフトをやっていた時のマネージャーの子だ。

「そうか、みっちゃんの子か。確かにあの目はみっちゃん譲りかも

な。」

俺はそのまま立ち上がり窓に向かった。外ではいろいろな部活が活動している。その中にはアメフト部もいた。部長の佐藤が熱心に指導している。仮入部生もなかなか頑張ってる。

「今年の1年は中々センスがあるな……。」

佐藤の投げたボールが遠くへ飛んでいった。

「あれが橘か……。」

橘がボールを拾った。かなり離れている。50Yつとこだ。この距離からでもそれくらいのはわかる。すると橘が振りかぶった。

「無茶だな。」

いくら野球で全国へ行っても無理だろう。たとえ届いたとしても……。次の瞬間俺は我が目を疑った。橘の投げた球は吸い込まれるように佐藤の胸へと返球された。しかも綺麗な回転だ。俺は数秒間絶句していた。鳥肌が総立ちだ。俺はそのまま自分の机に戻った。確かに全国のピッチャーということは肩がいいのは当然だろう。驚くべき点はあるのコントロールだ。胸元にあれだけのパスを出せるQBは全国でもそうはいない。俺はいろいろ考えながら書類を整理していた。引き出しを開けると、そこにはボロボロになった写真があった。

「懐かしいな……。」

俺はその写真を見た。この写真は俺が高校時代、3年の最後の大会

で全国制覇した時の写真だ。中央には俺と肩を組む俊一の姿があった。あれこれあの時からもう23年経つ。今この世にいるのは俺だけ。

「全国制覇……か……」

俺は書類を整理し終え、帰る準備をした。少し寄る所があるので早めに帰ることにした。俺は荷物を纏めて鞆に詰め、職員室を後にした。

俺は坂を上っていた。浜風が気持ちいい。赤い茜色の空が綺麗だ。俺は脇道に入り墓場に来た。そして墓場の中央にある目的の墓まで来た。

『片山家』

そう書かれた墓の前で俺は黙って立っていた。そして鞆から線香を出して火を点けて墓の前に置き、そして手を合わせた。俺はしゃがみ込んで墓に語りかけた。

「よう俊一、久しぶりだな。最近来れなくて悪かったな。前に来たのは半年前か？ お前の命日に来たつきりか。そうそう、美穂ちゃんが入学してきたよ。お前と同じ、優等生。まだ話はしてないんだけどな。後、なっちゃんの子も入学して来たんだよ。なっちゃんは今はアメリカだそうだ」

いくら話しかけても返事はない。しかし俺は話すのを止めなかった。

「今のアメフト部はクリスマススボウルどころか、あ、そう全国大会の決勝の試合の名前がクリスマススボウルって名前がついたんだよ。」

つか今は試合ができる人数もいねえ。お前と築いた黄金時代も何処にいったんだかな。半年前も言ったっけな。そうそう、それでなっちゃんの子がアメフト部の仮入部に来たんだよ」

俺はそこで言葉が詰まった。次に出て来る言葉に少し戸惑いを感じたからだ。しかし俺は正直に口にした。

「あいつはお前を凌ぐほどのQBになる」

俺はそう俊一の墓に向かった言った。俺たちの黄金時代のQBは俊一だった。正に最強のQBだった。視野、パス能力、洞察力、そして肩の強さ共に最強という一言で表すに相応しいやつだった。初めてあいつのパスを見たときは度肝を抜かれた。しかし、橘のパスを見たときはそれよりも強力な印象だった。全身鳥肌が立ち、身震いまでした。

「ちゃんと育ててやりやあお前以上のQBになると思う。次は監督として、碧山高校を全国に導きたいと思うんだ」

俺は立ち上がり墓に手をやった。

「なぐに独り言言ってるんですか先輩」

横から声がした。そこに立っていたのは篠原だった。

「先輩は止める、今は俺と同じ教師だろうが」

そう言うと篠原はクスツと笑い、

「教師としても先輩じゃないですか」

と言った。確かにそうだが、あまり先輩と言われるのは好きではない。

「後つけてたのか？ 全く……。つうか自分の部活はどうしたんだ？」

俺は裾に着いた土を払いながら聞いた。

「えらく早く帰るんで着いて来ちゃいました。弓道部は今日は休みです」

篠原はそう言っただけで俺の横に来た。

「俊一先輩が亡くなって、もう10年が経つんですね。時間の流れは速いものだ・・・」

篠原は手を合わせた。こいつも俺たちと一緒にアメフト部だった。ひとつ下の後輩だ。今は弓道部の顧問をしている。

「美穂ちゃんは先輩と一緒に優秀な努力家ですよ」

篠原は笑顔で俊一に話しかけている。そして立ち上がり俺の方を見て、

「全国に導くって本当ですか？」

そう聞いてきた。しかし俺は黙り込んでしまった。

「まっだ引きずっているんですか？ 俊一先輩が亡くなったのは先

輩のせいじゃないですよ」

そう、俺はあの日からずっと後悔していることがある。俊一の命を奪ったのは俺のせいではないのかと。俊一は10年前に交通事故で亡くなった。渡米する前日だと言うのに、あいつは夜遅くまで俺と練習していた。向こうへ着いてすぐ試合があるらしく、最後の調整だと俺に頼んで来た。俺は初めは止めた。前日にあまり無理しないほうがいいと。しかしあいつは、

「お前と練習できるのも今日で最後かもしれないんだ」

そう言つて俺に土下座をした。俺はあいつの熱意に負けて最後の練習をした。それが本当に最後の練習になるとはしらなかった。遅くまでハードな練習をした俺は、明日の朝の早い俊一を気遣い、俊一を納得させて練習を切り上げさせた。車で来ていた俺は、

「相当疲れてんな？送つてやるよ」

そうあいつに言った。しかしあいつは歩いて帰れるから大丈夫だと、そう言つて一人で歩いて帰つたんだ。俺は心配だった。練習中、あいつにタツクルをお見舞いして、ちよつと間脳震盪のうしんどうで倒れていたからだ。アメフトやラグビーではそれほど珍しいことでもない。しかし心配だった。しかし俺はあいつを一人で帰らせた。それが運命の瞬間だった。次の日俺は篠原の電話で目が覚めた。そう、あの夜俊一は交通事故で帰らぬ人となった。俺は後悔した。なぜ無理やりにもあいつを送つてやらなかったんだ。そもそも前日にあんなハードな練習を夜遅くまでしたんだ。そんな後悔を俺はずっと抱えている。

「俊一先輩は交通事故で亡くなった、先輩が悪いわけじゃないですよ」

俺はしゃがみ込んで俊一の墓を見た。

「俺がお前をアメフトの世界に引き釣り込まなきゃこんな事にはならなかったんだろうな」

俺はそう俊一に言った。

「何言ってるんですか！俊一先輩はアメフトやれてて幸せだったに違いありませんよ」

そうかもしれない。しかしこの結果を見ればアメフトをしていなければ生きていたかもしれない。何が幸せで何が不幸せなのかはわからない。あいつらにアメフトを教えて、全国を目指すことが本当にあいつらにとって幸せかどうかはわからない。

「幸せなんてものは、訪れる物なんかじゃないですよ。自分で掴むものです。生徒が幸せを掴みたいと言うのなら、僕たちはそれを全力でサポートする。それが教師たる者です。まあ僕の勝手な偏見ですけどね」

そう言っただけで篠原は去っていった。自分で掴むもの。もしあいつらが望むのなら、俺は全力でサポートするべきなのだろうか。

俺は線香の火を消して墓を後にした。その日の空は赤く燃えていた。

特別編：平賀健二（後書き）

どうでしたか？これからもこういう風に仁ではない他のキャラのス
トーリーを書いていくつもりです。

第十五話：足止め（前書き）

前回のあらすじ

河北から借りた本を読み、幸福の意味の難しさを知った仁。幸福は人それぞれ違うことだということを再認識した。そして、秘密基地でアメフトの関西大会の高い壁を聞かされた仁であった。

高校生の恋と青春を描いた青春ラブストーリー！。

第十五話：足止め

俺は近くの公園に向かっていた。なぜ公園に向かっているのかというと、電話があつたからだ。俺は朝早くから西城たちと釣りに出かけていた。そこにはあちゃんから電話があつたからだ。

「担任の先生がお前さんを尋ねて来ておるでの。みどり公園まで行つてくれんか」

そんなこんなで俺は公園へ向かっている。内心少し緊張はしている。わざわざ家に担任が尋ねてくるなんてよほどの事だろう。しかし何も悪いことをした覚えはない。俺は不安を感じながら公園へ着いた。公園では子どもたちが遊んでいる。すると向こうのベンチに平賀先生が座っている。俺は足早に先生の下に向かった。

「悪いな呼び出してちまって」

先生は申し訳なさそうに言った。どうも悪い知らせじゃないらしい。

「いえ、別に暇だったのでいいんですけど」

俺は先生の横に座った。

「橋とこういう風に面と向かって話すのは初めてだな」

俺は頷いた。なぜ呼び出されたのかわからない不安はまだあつた。しかしどうも自分からは聞き出しにくい。

「君のおばあさんは昔も今も変わらないな。元気なお方だ。みつち

「やん、いや、お母さんは元気か？」

「そう、先生は俺の母さんの高校時代の先輩だ。」

「多分、あつちに行つてから会つてないのでわかりませんが、多分元気だと思います」

先生は少し笑みを浮かべた。話が見えて来ないので俺は仕方なく聞くことにした。

「あの、俺に話があるんじゃないんですか？」

先生は俺の方を見て、真剣な顔で、

「お前、アメフトをする気はないか？」

不意を突かれたのかもしれない。俺は少しの間絶句していた。

「急に呼び出して何を言い出すんだと思つたかもしれないが、俺はお前の球を見て鳥肌が立つた。お前はアメフトはした事がないのだから？」

俺は頷いた。

「なら尚更だ。お前の球、俊一の球を見たときよりも印象に残っている」

俊一。美穂の父の名前。先生と共に全国制覇したチームのエースだった人だ。俺は少し驚いていた。俺の球を褒めて貰つたことを。佐藤部長もそうだった。西城たちも。俺の球を見てみんな驚いていた。

正直俺にはあんまり実感はなかった。野球の軟式の球ならもつと飛ばせる、そう思っていたからだ。コントロールにも自信あった。俺は別に驚くような事をしているつもりはなかったのだ。

「今のアメフト部の状況はわかってるだろう。人数すら揃っていない。佐藤たちはそれでも真剣に練習をしている。部活というのは自分から望んで入るものだとは思っている。しかしよければお前の力を貸してほしい」

驚く理由はもう一つあった。平賀先生のこういう面を見たのが初めてだったからだ。いつもはめんどくさがりの先生が、今日はいつもとは違う。何があったのかはわからないが、俺の気持ちはアメフトに片寄った。しかし、

「考えさせてください」

これが精一杯の答えだった。正直これほど期待されているのに断る理由などないはずだ。しかし、頭のどこか隅っこのほうで何かが俺を足止めしている。それが何かはわからない。俺を止める何かが、俺の頭には過ぎっていた。

「そうか。休みが明けると本人部の紙を貰うだろう。よければ頼む」
先生はそういつて立ち去った。俺は少しの間ベンチに座っていた。何を考えるもなく、ただ無心で俯き座っていた。すると俺の前に人が来た。

「な〜にしてるの」

見上げるとそこには美穂が立っていた。ジャージ姿のいつもの格好

の美穂だ。美穂は俺の横に座った。

「今日は河北さんと一緒じゃないんだ〜」

美穂は空を見ながら言った。

「なんで河北と一緒になんだよ。別に関係ないじゃねえか」

美穂は横目で俺を見た。

「ふ〜ん。ならいいけど」

美穂はそういって欠伸をして体を伸ばした。

「昨日、仁君のお母さんに会ったよ」

俺は驚いた。今日は驚いてばかりだ。母さんと会った？ 帰ってきていたのだろうか。

「せっかくお母さんが帰って来てたのにどこか行ってるなんて」

少し後悔はしているが別に大したことはない。またいつでも会える。

「まあ今度は夏休みだな」

俺はそう言った。美穂はクスツと笑った。

「そうだ、昨日ね、仁君のお母さんと私のお母さんが話してるのを聞いたんだけど、仁君とは昔に会ってるらしいんだって」

初耳だ。そういえばここに来た時に幸恵さんに挨拶に行ったとき、
「大きくなつたわね」と聞かれた気もする。

「お父さんのお葬式の日にだって。私たちまだ6歳だよ。覚えてる
はずないよね」

美穂は笑いながら言った。6歳。別に記憶に無いくらいの歳ではな
い。しかし俺にも覚えはなかった。

「んなガキのころの事なんて覚えてられねえよな」

俺も笑って返した。

「そうだよね」。私も覚えてなかったもん」

美穂がそう言った時、美穂の鼻に雫が落ちてきた。雨だ。俺たちは
走って家に向かった。帰る途中に後ろから美穂を眺めていた。俺を
アメフトへと行かせない原因はこいつだろうか？俺はそんな事を
思っていた。俺は家に着くと、携帯で西城に電話をした。

今日は家で寝よう。

第十六話：ドレッド頭（前書き）

前回のあらすじ

急に家に訪ねてきた平賀の口から思いがけない事を聞いた仁。いつもとは違う平賀を見て仁の心は動く。しかしまだ決心がつかない仁。自分を足止めするのは何なのかを考える仁であった。

高校生の恋と青春を描いた青春ラブストーリー！。

第十六話：ドレッド頭

ゴールデンウィークが明けた。母さんが帰って来たのに会えなかったのは少し残念だ。しかしまた夏休みに帰ってくるだろう。それよりまた学校を長い長い坂道を使って登校しなければならないと思えばぞつとする。

五月に入り、月末には定期考査を控えている。五月の中ごろには、「交流遠足」という行事がある。名目上交流なのだが、地元高なだけあってあまり交流を目的としていない。言わばお楽しみな遠足なわけだ。三組しかないクラスを解体して、クジによって班を決めるというルールらしい。他のやつらは誰となるかのドキドキものだが、高校からこつちに来た俺には知り合いも多くな、本当の意味でドキドキだ。そして今日がその班の発表の日である。

「誰となってるか楽しみだな」

西城が楽しそうな顔で言う。

「まあ誰となっても僕たちはあまり変わらないよね」

長瀬が突っ込む。

「俺たちとよりかは、橘の方が楽しみだろ。なんたって知らない奴らばっかだからな」

白石が笑いながら俺に言った。

「ホントそれだぜ。あんま変な奴らと組みたくねえっつの」

俺は少しネガティブだった。自称人見知りの俺は、こういう行事は苦手な方だった。

「よし、それじゃあ紙配るぞ。まあ誰となっても恨みっこ無しだ。恨むなら神様を恨め」

先生が紙を配る。先生とはあれから話しはしていない。アメフト部に入るかどうかはまだ決めかねている。紙が来た。俺は自分の名前を探した。

「16班……誰とだ？」

俺は同じ班の名前を見た。そこには「河北静香」「高瀬香織」「六條皐」の名前があった。河北と同じか。しかも高瀬まで。俺は少し安心した。知っている女子で良かったと。男子とならまだマシに喋れるだろう。そう思っていた。しかしそれは一瞬のうちに崩れ去った。六條……。仮入部の時のドレッド頭だ。あの不貞腐れた奴と一緒にの班とはお先真っ暗だ。

「よし、これからその班で分かれて話し合いだ。紙に書かれている教室へ行け。以上解散」

俺は家庭科室だ。

「橘君、あなたと一緒にの班ね。家庭科室でしょ？早くいきましょ」

俺は高瀬と共に家庭科室へ向かった。家庭科室へ着くと、すでに河北が座っていた。俺は指定された席についた。六條はまだ来ていない。

「あ、橘君、あの本どうだった・・・？」

河北が話しかけてきた。

「ああ、あれな。なんか難しくてよくわからなかったんだけど、言いたい事はなんとなくわかるんだけどな。でもあんな本読んでるなんて河北すげーよな」

俺はそう言った。確かにあんなに難しい本を読んで理解するのは大変な事だ。

「ごめんね・・・。次はもう少し読みやすい本にするね」

そう言って河北は微笑んだ。

「そうしてくれると助かるよ」

俺も微笑み返した。すると河北は俯いてしまった。どうしたのだろう？ 俺は疑問に思ったが、深く突っ込まないことにした。すると横から高瀬が小声で話しかけてきた。

「あなた、河北さんと仲良いの？あの子が男の子と話してるの見たことないから」

仲が良いのかどうかはわからないが、ようやく最近喋れる様になったとこだ。俺はそう高瀬に言った。すると高瀬は目を細めて、

「橘君はモテモテなのね」

そう言い、高瀬は河北と話を始めた。別にモテモテとかそういうのじゃないような気はする。ただ普通に世間話をしているわけだし。チャイムが鳴り、他の班は話し合いを始めている。しかし六條のやつはまだ来ない。高瀬の怒りも限界に来ている。

「も、何を考えてるのよ。チャイムが鳴るまでに着席が常識じゃない」

まあ高瀬の怒りがわからないこともない。すると前の扉の開く音が出て、六條が入ってきた。六條は先生に捕まり、いろいろ言われた後こっちに来た。

「すまんすまん。トイレしといたら送れてもって」

そんな言い訳で高瀬が治まるわけがない。

「すまんすまん。警察いらさないのよ！ あなたのせいでみんなに迷惑がかかっているのよ」

古い言い回しだ。警察って……。どんだけ大袈裟なんだよ。

「あやまる以外どうしようもないやろ。どないせえちゅうーねん。そない怒るとせつかくの綺麗な顔が台無しやで」

高瀬は少し顔を赤らめて、

「な、何言ってるのよ！ もういいわ、早く始めましょ」

俺と河北は唾然としてた。うまくやり過ごしたなというのが本音だ。そして何より六條がこういう奴だとは思ってなかったので、不意を

突かれた感があった。六條は俺の隣に座り話しかけてきた。

「ガミガミ言う女はあかんちゅうねんなあ、自分もそう思うやる？」

それには激しく同感だ。しかし高瀬の視線を感じ、否定した。

「あれ？自分アメフト部の仮入部に来とらんかった？」

ずっと目を閉じていたように思っていたが気付いていたのだろうか。

「ああ、いたけど。お前ずっと音楽聴いて目を閉じてなかったか？」

そう言うと六條は笑いながら、

「そうやったけ？ 悪いな、俺昔のことすぐ忘れるねん」

昔の事って……。つい最近のことだが。六條と話していると、高瀬がまた怒鳴った。

「静かにできないの！？ 早く決めないと決まらないでしょ！」

俺たちは話すのを止め、高瀬の話に耳を傾けた。

「今回の遠足は、大阪・奈良・京都から好きな場所を選んでの自由観光。まずはこの三つから行き先を決めないと」

高瀬がそう言うと六條が声を発した。

「そないなの、大阪がええに決まってるやんけ」

決まっているのだろうか？ 六條は自信満々に腕を組んで座っている。

「なんであなたが決めるのよ。あなたは大阪がいいのね？ 橘君、あなたはどこがいいの？」

奈良と京都は古都ということでも名所めぐりがメインだろう。それに比べて大阪は美味しいものが食べられそうだ。

「俺は大阪でいいよ。美味しいものも食べえそうだしな」

六條はウンウンと頷いている。

「私も・・・、奈良と京都は観光したことあるから、大阪でいいかも・・・」

案外あっさりと決まりそうだ。

「そうね、じゃあ大阪に行きましょう。六條くん、あなた大阪に詳しくそうね。案内してくれる？」

大阪の方がええに決まってるやろ、と、堂々と言ったからにはいろいろ知っているのだろう。いろいろ六條の話を聞いているとチャイムが鳴った。俺たちはプランを六條に任せることにした。

俺たちはいつもの4人で帰っていた。皆、なかなかいいメンバーだったらしい。西城は楓さんと行きたいなどとぼやいている。

「そっぴや、お前あのドレッド頭と一緒になんてな」

白石が話しかけてきた。

「マジか。お前も災難だったな」

西城が哀れんだ目で俺を見る。

「別に悪い奴じゃねえよ。気さくないいやつだったぜ？」

二人とも驚いた顔をしている。

「人は見かけによらないってことだね。まあ出会いが悪かったのかな」

長瀬がいいフォローをいれる。

俺たちはそれから別れて俺は家に戻った。

来週には遠足だ。

意外と楽しみにしていたりする。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0035d/>

‡ TRUE HAPPINESS ‡

2010年10月20日19時21分発行